

中東イスラーム研究の先達者たち No. 1

弱者の細道を行く

アメリカ中東研究に携わった日本人の研究者

黒田安昌 著

NIHU プログラム
イスラーム地域研究東京大学拠点グループ 2
「中東政治の構造変動」
TIAS Middle East Research Series No.2

はしがき

－「中東イスラーム研究の先達者たち」シリーズ刊行に当たって－

NIHU プログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点グループ2「中東政治の構造変動」では、研究活動の一環として、「中東イスラーム研究の先達者たち」プロジェクトを2007年度から試験的に開始している。このプロジェクトは、先駆者的な研究者とのインタビューを記録として残し、その研究資料を整理・分析することを通じて、中東研究・イスラーム研究のこれまでの歩みを振り返り、その成果を確認することを目的にしている。次世代の研究者がこのプロジェクトの成果から、今後の自身の研究発展に生かすものをいかなる形でも学び取り、感じ取りすることができれば幸いに思う。学問の本義が人を励ますところにあると考えるならば、先達の研究者が歩んだ道に接することは、後に続く私たちを何よりも勇気づけるものであろう。

シリーズ「中東イスラーム研究の先達者たち」第一回として刊行するのは、黒田安昌先生の『弱者の細道を行く：アメリカ中東研究に携わった日本人の研究者』である。先生の説明によるとタイトル「弱者の細道」は、日本人がアメリカで中東を研究するときに出会うさまざまな困難、そのデコボコだらけの狭い道を意味するものであるという。日本とアメリカ、そして中東という研究世界の狭間の道を、第二次世界大戦敗戦直後から今世紀にいたる激しく動く政治情勢に身をもって接しながら、研究者として生きた黒田先生の数々の経験と知見には、繰り返し読み直して学ぶべきものが多い。

黒田先生とのインタビューは、発案者である藤田進氏（東京外国語大学）と臼杵陽氏（日本女子大学）と長沢が2007年8月28日に行なった。先生からのお話は、最初は駅前のファミリー・レストランで、それから先生のご自宅に場所を移してうかがった。ご自宅には奥様からご夕食を用意していただくほどに長居をしたが、今回収録するのはうかがったお話の主要な部分について話題の項目別に整理・編集したものである。この編集は飯野りさ氏（国立民族学博物館共同研究員）にお願いした。ここに記して謝意を表したい。また、インタビューから刊行まで丸1年かかるなど諸般の事情で遅れてしまった点も、黒田先生にこの場を借りてお詫び申し上げたい。

なお、この「中東イスラーム研究の先達者たち」プロジェクトの成果としては、一足早く7月に、故吉岡俊輔先生（元気象大学校教授）の残された草稿などを整理し、一部電子画像化した「吉岡俊輔氏研究資料」が本グループのウェブサイトに掲載されている。ご関心のある方は、同サイトにもアクセスされることを願いたい。同サイトのURLは、下記のとおりである。

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-chuto/yoshioka-sensei/html/newpage1.html>

2008年8月

NIHU プログラム・イスラーム地域研究
東京大学拠点グループ2「中東政治の構造変動」

研究代表 長沢栄治（東京大学東洋文化研究所）

弱者の細道を行く

アメリカ中東研究に携わった日本人の研究者

黒田安昌

目次

第1章 留学、大学、移民差別	1
第2章 アメリカでの教員生活：差別と政治的圧力	12
第3章 中東との出会い	19
第4章 アメリカで学問をすることの困難さ	33
第5章 実際に知り、体験し、複眼的な思考を心がけることの重要性	45
黒田安昌先生の経歴と業績	55

第1章 留学、大学、移民差別

留学を決意、オレゴンへ

——：留学を決意されたのは、高校生のころですか？

黒田：そうです。そのころ私は、まだ一年生でしたね。高校一年生ぐらいのときから行きたくなりました。

——：高校生の時には、もう戦争は終わっていましたね。

黒田：終わっていました。戦争が終わったのは、中学生のころでした。留学ですが、行くと言っても、第一にお金も替られません。1ドル360円でも。ただ、一つだけ方法があったのですよ。それがフルブライト、その頃「ガリオア」基金¹と言ったのです。でもそれは大学を卒業しないといけない。高校生には奨学金制度がなかったのです。どうしたらいいか、と。とにかく私が知りたかったのは「アメリカがどのようにして日本に打ち勝つことができたか」というアメリカの強みの素というか、物質的なものだけではなく精神的なものとか、色々な面でどういうものか知りたかったのです。それで行く決心をしました。

ところが今だったら色々な情報もあるし、留学をするための支援センターもあります。私もハワイ州の大学に行くための支援団体の顧問になっていますが、いろいろなところがあって。それから英語も、外国人のための英語のクラスもあれば、あちこちに英語を教えるところもある。しかし、当時はほとんどなにもありませんでした。そこで、まだ受験まで少し余裕があった高校2年の時に、1年間、週に5回、数寄屋橋のそばにあった日米会話学院に通いました。

——：その頃は数寄屋橋ですか。今は四ツ谷ですよ。

黒田：ああ、そうですか。数寄屋橋の橋からあまり遠くないところですが、その小学校か中学校の建物を夜借りて、夕方というか午後の授業が終わってからでした。ですからあそこに行ったのが4時から5時。高校が終わってから通いました。高校は春日部だったのです。春日部高等学校。そこから1年間、通っていたのです。

——：数寄屋橋の横にあったのですか。

黒田：数寄屋橋のどこだか、記憶は曖昧ですね。降りた駅は有楽町です。

——：菊田一夫の「君の名は」がはやっていた頃ですか。

黒田：ああ、そうなのですかね。まあ、そんな頃かもしれません。もちろんラジオです。テレビなんかありませんから。毎日、数寄屋橋に通っていました。でもそんな1時

¹ 「ガリオア計画 GARIOA Program」は1949年に始まり、現在の「フルブライト奨学金」に1952年に引き継がれた。GARIOA: Government Aid and Relief in Occupied Areas.

間か2時間、1週間、1年やったからといって、基礎的なことはある程度わかるかもしれませんが、**This is a map**なんて教わっても、そんなので通用するわけがありません。だから行けない可能性があるかと思って、受験勉強の為に3年生の時は行きませんでした。その間、行くための手段を色々探して、やっと方法が見つかって、それで行くことにしました。ところが行っても、今だと外国人留学生用の英語のプログラムが多く大学のありますが、その頃は全然ありませんでした。受け入れ態勢が備わっている大学を見つけることができませんでした。大学の受け入れ態勢を知るのにも、先ずカタログを取り寄せなければなりません。そこで最初の1年は、オレゴンで高校に行きました。

———： どうしてオレゴンなのですか。

黒田： たまたまオレゴンに「つて」が見つかったのです。その頃は、あなたの生活を保証しますという保証人がいれば行けたのです。また、その頃は連合軍の占領下にあり日本の航空会社はなかったのです。アメリカ行きの便は、パンナムだけだったので、パンナムもノンストップでここからハワイやアメリカへは行けませんから、グアム島かどこかを經由して行きました。そして乗る人といったら、政府の高官とか要人でしょうね。ですから、残された渡米手段は横浜港から日本郵船の貨客船でしたよ。12、3人の乗客のほかは荷物ですよ。でも、一等客というのかな、あれは。船長と食事をする事ができたのです。そこで会った人というのは、留学する人もいたし、戦争花嫁²、それから外交官で1年か2年、アメリカへ留学する若い人たちでした。外交官というのは試験をパスすると、国が外国へ行かせるのです。東大卒だったかの外交官の卵が二人いて、コロンビアかどこかに行く途中でお会いしました。

———： 結局、黒田さんは高校生の段階で行くと決めて、受かったのですか。

黒田： 「受かった」ってそんな受かったというか、アメリカに行くということは、誰かアメリカで保証してくれる人が見つければ行けたのです。

———： それは日本の側で誰か見つけたのですか。

黒田： アメリカで、ですよ。でも、日本にいたときから文通や何かでそういう契約とか約束をしてもらわないと、先ずアメリカからのビザが下りません。

———： それは、随分、いろいろなことをトライされて行かれたということですね。

黒田： そうです。当たり前かもしれませんが、多くの大学では英語力の不十分な留学生の受け入れ態勢とかは、全くなかったのです。カタログを取り寄せるにしても、航空便で出しても、カタログは船便で来るので最低一ヶ月以上かかるし、ネット時代とは隔世の差です。

² 第二次世界大戦後、進駐軍兵士（主にアメリカ人）と結婚した日本人女性。

幼少時の記憶：戦中、そして戦後の混乱

——：あの頃、アメリカへ行くのに何日くらいかかったのですか。

黒田：11日間ぐらいです。ちょうどサンフランシスコで吉田首相が条約にサインして、オペラハウスかどこかにいた頃に、サンフランシスコに着いたのです。1951年の9月の初旬でした。その翌年、4月の28日に講和条約が発効されました。ですから私が行ったのは、まだ人々が橋の下で生活をしているような時です。その頃は「浮浪者」と言っていましたが、今はホームレスと洒落た名前に変わっています。そういう人たちがいる頃で。たしか、お米は未だ配給だったし。高校の修学旅行はお米を持っていかねばならない時代でした。

——：そうそう、あの頃だと、東武鉄道で北千住まで来て国鉄に乗って上野、有楽町ですか。

黒田：そう、北千住からそうです。日暮里かな。

——：乗り換る上野駅構内には戦災浮浪者たちが大勢たむろしていて、その中を縫って有楽町へと向かわれたのでしょうか。

黒田：アメ横はその頃もありました。今もありますね。

——：あの頃はある意味で一種の開放感がありましたよね。要するに在日の人たちがある意味、解放されて、闇の世界だけど自分たちの力で生きていくと。

黒田：たくましい人たちです。素晴らしい人たちです。しかし、今から考えると本当に無謀なことをしたものです、私は。一人息子なのですよ。

——：黒田少年の中では戦争前の皇国少年の意識と、敗戦後の占領下になったという点での混乱というものはなかったのですか。それともアメリカの力強さに憧れて行ったのか。

黒田：何というのでしょうか。私の生まれは東京です。四ツ谷の周辺で生まれたらしいです。そして、三つぐらいの時に、埼玉県の草加の近所に移って、母の実家の土地を一部借りて、そこに私の父と母が家を建てました。そこで育ちました。周りはみな農家でしたが、私の父は日通で働いていました。母は助産婦でした。だから、農業関係の仕事とは違いました、私は三つぐらいまで東京で育って、東京弁というか、言葉も少し違っていただいのでしょうか。だからそこに着いたときから、今でいう辺境人というか、少し端っこに住んでいるような人間だったのかもしれない。

そういう環境ですとずっと過ごして、私は一度だけ小学校の時につかみ合いの喧嘩をしたことがあります。先生に止められたのですが、その原因というのが、私、たまたま外国に違和感がなかったのです。それであるときに模型の飛行機を作れと言われて、うまく作ったのですよ、5年生ぐらいのときかな。そしてそのマークが日の丸ではなくドイツのマークを書いたのですよ。そうしたら、警察官の息子が「お前、日本人のくせになんでこんなものを作る」と言って、その飛行機を壊したのです。

それで、私が怒ってつかみ合いの喧嘩になりました。でもドイツのスワステカ(卍)を描いたのは、私一人だったのですよ。

オレゴン大学と松岡洋右

———：同盟国だからいいということですか。

黒田：同盟国だからいいと言ったのを覚えています。三国同盟（1940年）を結んだりした松岡洋右（1880 - 1946）が外務大臣でしたよね。彼はオレゴン大学の卒業生なのです。彼は苦学だけではなく非常に差別を受けているのです。1905年に法学部を2番で卒業するのです。ところが、彼は床屋で髪の毛を刈ることも出来なかったのです。若い青年が床屋に行っても髪の毛を刈ってもらえない。それで鏡を見ながら自分で切ったのです、虎刈りでも何でも。そういうトラウマを経験しています。それを私がたまたま当時の新聞で発見したのです。私が大学院の学生の時に、あるアメリカ東部の教授が歴史の本を書いている、松岡洋右はオレゴン大学を卒業しているが、その頃、彼がどんなことをやっていたか調べて欲しいという要請が来て、私が日本からのたった一人の助手だったので、「お前やってくれないか」と頼まれて調べたのです。

彼は国際連盟（ジュネーブ）で walk out をした人物です。「I will not come back 私 はもう戻らない」という有名な台詞を残して、議場を出たのです。その帰路、ニューヨークを経て、さらにオレゴン州のユージン市に泊まって、それで東京に戻ります。彼は満州事変を擁護したわけですが、その頃の新聞によると、「オレゴン大学法学部を優秀な成績で卒業した松岡は、最も困難な仕事を最も素晴らしい雄弁で正当化しようと試みた」というような意味の記事が載っていました。雄弁家だけど結局、言っていることは…、というような記事でした。このように、彼はいろいろな苦勞をしています。彼が反米になった理由に差別があったかも知れないという仮説はうなずけます。

目に見えない差別と偏見の存在

———：黒田さんご自身も留学されて勉強する中で、そういう日本人に対する差別は体験されましたか。

黒田：そんなに沢山はしていませんが、経験はしています。例えばさっき言ったようなたぐいのことだとか。でも、給料のことなどは、私個人というよりも全ての有色人種のことですが。それから現在の差別の多くは目には見えない性質をもっているという事実です。見えない透明の天井とでもいいますか。誰も「私は差別をします」なんていう看板を持って歩いていません。皆、紳士淑女です。でも裏で何をやっているかわからないというのが実態です。人を雇う場合にも、性別、人種、宗教、年齢

による差別待遇はしませんと、表向きは皆言うように義務付けられているのですが、それが実行されていないことを証明するのは容易ではありません。

——— : ヨーロッパからユダヤ人移民もアメリカに来ました。一方でアメリカにおける反ユダヤ人というかユダヤ人嫌いということもある。そういうことからユダヤ移民もいろいろと嫌な思いをしているわけですよ。そういうユダヤ人自身がアメリカであれだけ強力な、政治的にも強力な力を持っているというのは、この課題はどうなのでしょう、他のエスニックな人たちにとって。

黒田 : 結局、違いというのは彼らの団結力というか、社会の要所要所に有能な人を振り込む技術というか、知識を彼らが持っているということでしょうね。よく *Jewish mother* という言葉があるのですが、日本語だと「教育ママ」になりますか。結局、ユダヤ系の女性というのは、子供をよくしつけて勉強するようにします。

でも、私もそういうユダヤ人にも会いましたが全てが成功するというわけではありません。一人あまり成功しなかった人がいます。彼がよく言っていたのは「お前は早くから働くことをおぼえて勤勉な人にならないと、いつになっても自立はできないと、母や父に小さい時から言われた。その自立への試練として近所を回って卵売りをやらされてね。」でもそんなに楽に売れず、彼は家に帰ってそっと押入れとか箆笥に卵を入れる。そうすると腐ってしまうのです。案の定、彼はあまり成功しませんでしたよ。だからいつも熱心に「勉強しろ」とか「勤勉になれ」と言っても、必ずしも成功するわけではないでしょうが、とにかく一生懸命やるということでしょうね。非常に教育に熱を入れます。

パレスチナ人もそうです。特にキリスト教徒は。文盲率も低いですし。特にキリスト教徒のアラブ人というのが一番嫌われるというか、一番虐待を受けているといえは虐待を受けています。私がアメリカでイスラエルから来たユダヤ系の学者と会って、2週間ばかりいろいろなセミナーをしたことがあって、一緒によく食事もして友達になって、よく話もしました。彼が何に興味を持っていたかということ、アメリカのインディアンです。原住民の。そして私がそのことについて、「ところでアメリカのインディアンはアメリカ社会では嫌われているが、イスラエルで一番嫌われている民族は誰なのか」と聞いたのです。そうしたら彼が“*Damn Christians*” (クリスチャンの野郎たちだ) だということです。「なんだ、イスラム教徒じゃないのか」と私が言ったら、“*No*” と。「何故か」と聞いたら、“*They are the ones who discriminated against us in Europe.*” (ヨーロッパでは彼らこそが私たちが差別したからだ) ということです。だから、キリスト教徒に対してのほうが辛く当たっているのです。それで結局、キリスト教徒がパレスチナ人の中には一割いるということもアメリカのメディアではあまり取り上げてくれないのです。アラブ人といったらイスラム教徒。ベールを被ったイスラム教徒だとか、そういうイメージなのです。

アメリカへの移民：ユダヤ人、日本人、アラブ

結局、ユダヤ人はどうしてそんなに成功したかということですが、金融界、学会、弁護士とか、そういう職業にたくさんのユダヤ系の人たちが入ってきたということでしょうね。日本人とユダヤ系の人たちがアメリカに移民した時期というのは、大体同じ時期です。19世紀の終わりごろ、ちょうど明治維新のころでしょうか、1868年ごろですか。そんなに違わないのです。ところがユダヤ人のほうがはるかに大きな影響力を持っている。それはどうしてかということになるのですが、結局、要所にそういう人たちを配置させる術を持っている。私が博士号をとった時の指導教授もニューヨーク生まれのユダヤ系、UCLAやハワイ大学に紹介して教職を得ることができたのもユダヤ系友人（非シオニスト）のお陰でした。それから、彼らは、表面上はともかく、裏に回って工作する術に非常に長けている。日本人はその点、竹を割ったようというか、思っていることをそのままを表現してしまう。そういう傾向があるのではないのでしょうか。例えば、つい最近の参議院選挙（平成19年8月）で民主党が自民党に圧勝した直後のことです。駐日アメリカ大使シーファーが自衛隊のインド洋での石油の供給問題について、民主党代表小沢一郎に会見を申し込みにましたが、会談した時の小沢代表の対応は率直の度が過ぎた感じを受けました。それからもう一つ。これはあまり言っていなかったのですが、イノウエ上院議員³はご存知ですよね。4、5年前ですが、日米協会⁴と日本の国際交流基金が、彼と日系のことについて話す催しを開いて、私も行ったのです。そうしたら、そこに元衆議院の議長だった自民党の二世議員がいました。彼は、三世目も若い議員として出ています。自民党の人ですが、彼は肝臓の手術をして息子さんが。

イノウエ上院議員、アメリカでの差別、日本での差別

———：ああ、河野洋平さんですか。

黒田：彼はじっとイノウエ上院議員の言うことを聞いていました。イノウエ上院議員はものすごく雄弁な方です。英語も素晴らしい英語で。彼が言っていたことの一つにこういうことがありました。1959年かな、初めて彼が議員として連邦議会に行った時のことです。アメリカの政界ではしきたりとして、初めてその民族の議員が出るとHome Country といふ先祖の国に表敬訪問をするのです。「貴国の子孫はこんなに立派に成功しましたよ」ということを見せる為。そして、「我々の国家というのはこんなに民主的です」とPRするのです。それで、イノウエ氏は天皇陛下と会って、そしてその頃の首相は佐藤首相でした。

³ Daniel Inouye (b.1924)：ハワイ州選出上院議員。日系2世。第二次世界大戦が勃発すると志願し、最も多くの勲章を得た442部隊で活躍、右腕を失う。

⁴ The America-Japan Society, Inc.：(社)日米協会、1917年設立の民間非営利団体。

佐藤首相にも会って、最初、佐藤首相が「日系人はあちこちに進出して素晴らしい仕事をしている。いいことだ。」といろいろなことを褒めて、そして彼が「ありがとうございます」と言っただけで、「私もおかげで、議員になることが出来ましてこうして伺ったのですが、一つだけ質問があります。アメリカのしきたりの一つとして、議員生活の終わりが近づくと、よく大使として祖先の国に、例えばケネディだったらアイルランドになりますが、大使として派遣します。もし私が日本にアメリカの大使として来たらどう思いますか。」と聞いたら、彼が「そもそも日本の外交官とか政治家というものは、有名な家というか、貴族の出だとか元の士族、そういう出身の人しかなることができない。ましてや大使だとかはそういう人しかいない。不幸なことにお前達の祖先は負け組の一人だ。生活に困って仕事がないから移民となって出て行ったのだから、そういう人たちに大国の大使として来てもらっては困る。」というようなメッセージを出したのです。イノウエ上院議員は嫌な思いをしたわけです。「今のところはそういう状態だから歓迎するわけにはいかない」ということを彼は言いたかったのでしょうか。それが実情かも知れませんが、私がもし総理だったら「ある程度、そういう偏見もあるだろうけど、私自身はあなたを歓迎します」とかなんとか、足せばよかったですよ。それを河野さんが苦虫を潰したような顔をして聞いていましたよ。そういう状態で「迎えられない」ということだったというお話です。

だからそれもあると思うのです。結局、戦争が終って彼はヨーロッパの戦場で片腕を失って帰ってくるのです。そして帰ってきて、ハワイに帰る途中にカリフォルニアに寄って、軍服を着たまま床屋に行ったのです。そして、それも軍人のお友達と一緒に行ったらいいのですが、そうしたら、「お前はジャップだから髪の毛を刈るわけにはいかない」と。それでその時にいた連中が、テキサスなどから来た veteran (退役軍人) だったらいいのですが、非常に怒ったけどどうすることもできません。そういう経験を彼はしている。だから、アメリカ社会では完全には歓迎されない、また自分の祖先の国からも、今の言葉で言うと「負け犬」ですよ。loser という言葉を彼、イノウエさんから聞きましたが、私は彼に手紙で「日本語では何と言ったのですか」と聞きました。そしたら、彼は日本語が上手なのですが、「日本語で何と言ったかは覚えていないが意味として私のはっきり覚えているのは loser だ」と話していました。「私の祖先は loser じゃないのだけど」と彼は言っていましたけど。まあ、日本人はアメリカでもそういう目に遭うし、また自分の国からもそう思われてしまう。しかしイスラエルはそうではないです。歓迎しています。ユダヤ教の人だったら誰でも歓迎してくれるでしょう。日本はそうじゃないです。だから、そういうところから違いが出てくるのではないのでしょうか。

残念ですがそれが実情です。ですから、いいところもあれば、悪いところもあるで

しょう。それから、中東を勉強するにおいても研究するにおいても、中東出身の人が、日本に比べて相当アメリカ社会に実際に住んでいるということでしょう。特に学会にいたらユダヤ系ですよ。これに反して、日系二世達は収入の多い医師、歯医者、弁護士等の職業に就く割合が多く、ハワイ大学でも日系の教授は数少ない存在です。日系人の選んだ道は、格差や差別のない民主主義社会を築く為に、むしろ合法的な革命を夢見て、弁護士になり、さらに政界に進む道でした。アメリカ本土は条件が違いますが、ハワイの州議会で、日系人が過半数を獲得した 1954 年の「静かな革命」がその成果の一つです。事実、イノウエ上院議員自身がその一人でした。

ハワイ：改革の地、軍事経済の地

黒田：ところで、私は大学生時代、1954 年最高裁判所の「Brown vs. the Board of Education」で「分離すれど平等」法が非合法化された頃、NAACP（全米有色人種振興会）で活動していたことがありました。さらに、ハワイでは「日系市民連盟」で役員をしていたこともあるのですが、その時、ホノルル支部の会計を務めていた日系人から聞いた身の上話は忘れることができません。彼は 1930 年代、オアフ島で日系人を受け入れてくれる唯一のマッキンレー高校を卒業しました。公認会計士を夢見ていた彼は二年間働きながら、さらに通信教育で学べるラサール・スクールで会計学を学んだのです。卒業後、公認会計士になる為に試験の願書を提出しようとしたら、役人が「お前たち日本人は試験を受ける資格がない」と言うのです。戦後、日系人も公認会計士になる資格を与えられたが、彼は試験も受けられず、非公認の会計士として日系人の会社で働き、今では退職し、日系市民連盟の会計を無償でしているのだと聞き、私は「ご苦労様でした」と言うしかなかった。

結局、そんな差別と格差社会を変える為には、政治も変えなければいけないというのが彼らの考えで、第二次大戦勃発後、先ずアメリカへの忠誠心を証明するために志願兵となり、立派な戦果を挙げ、退役軍人としての奨学金で大学に行き、卒業後、ロースクールに行き、司法試験に合格後弁護士、検事、裁判官となりそれから政界入りをするという、合法的かつ効果的な社会改革を夢見たのです。それがちょうど 1954 年ごろなのです。その世代の人たちが、イノウエ上院議員、故パッツイ・ミンク下院議員、故マツナガ上院議員などいるわけですけど、そういう人たちがそこで静ながら革命を起こしたのです。州議会ですが、その頃は Territorial Legislature（領土の議会）と言っていました。州として認められていなくて、単なる領地だったのです⁵。その議会で日系人を中心とする民主党が過半数の勢力を獲得して、教育

⁵ ハワイは 1959 年にアメリカ合衆国の第 50 番目の州となる。

なんかをどんどん変えていったのです⁶。例えばそれまで教科書はただではなかったのです。ですから、貧しい家の子供たちは教科書が買えなかった。それが、教科書が無料配布になりました。それから、学校は固定資産税によって賄われているので、貧しい地区では納める税金が少ない、そうするとその地区の学校の予算も少ない。それではまずいということで、州全体を一区としたのです。そして、予算は全て各学校の生徒の数に応じて均等に与えることにしたのです。それで教科書は無料になり、貧しかった地域の学校の設備も充実し、均等な教育を受けられるようになりました。それでガクッと変わって、ハワイ大学はそれまでは金持ちの子供しか行かなかったのが、授業料を安くして貧乏人の子どもでも行けるようになりました。それに、いろいろな奨学金制度を作り、どんどん行けるようにして、さらに新しい教授も雇い始めたのです。ですから、今でも授業料は他の州立大学と比べて安いのです。ハワイ大学にはそういう歴史があるのです。

———：東京と比較すると、環境は良さそうですが、どうですか。

黒田：そうですね、環境としては、ハワイとここ〔東京〕はちょっと比較できないです。でもいいところもあればハワイだって悪いところもあります。スラム（貧民街）もあり、ちょっと人間が住めないのではないかいというところもあります。それがアメリカのよくないところ。日本も、少しずつそういうところがまた出てきているようですが。

———：かつての砂糖農場みたいなのは機械化されているんですか。

黒田：砂糖はもう作っていません。サトウキビはもうないです。それに代わる産業がないので、ハワイ島のほうはあまり栄えていません。それで職を失った人たちが、ホテルの仕事だとかをやりますが、ホテルの仕事というのは低賃金です。ネオリベラルな民営化でさらに低賃金化しています。日本もそうなりつつありますけどね。アメリカのほうがそれよりもっと極端なのかもしれません。ですから大変です。一見楽なように見えますけど、実際は大変です。

ハワイはパラダイスというか楽天地ですけれども、実際そこで生活をするとなると、観光客としては、みな、歓迎してくれますが、競争相手になったら大変です。ですから、ただ単なる観光客や学生、客員教授なんかとして行っている場合には競争にもならないので歓迎してくれますが、競争相手や同僚となったら別問題です。それはどこでも同じかもしれませんが、そういう点もあります。だから、中東からの人も、日系の人も同じような状況にあると思います。アメリカ社会に飛び込んでいくには非常に苦勞するのです。ユダヤ人も苦勞していると思います。それで彼らは辛

⁶ 民主党は日系人の入党を歓迎したが、ロックフェラーなどの五大財閥を代表する伝統的共和党はそうではなかった。

い目にあっていますから、何とか改善しようとするムーブメントになるのでしょうか。約半数が、4割ぐらいのユダヤ系の人口がアメリカに住んで、同じぐらいの4割がイスラエルで、あとの2割が世界各地ですか。そんな状態ですよね。だから数値からいうと全米人口の数パーセントにも満たないのですが、しかし勢力たるや驚くものがあります。

———：ハワイ州というのはアメリカ全体の中での州としての「経済的豊かさ」というのはどの程度なのですか。

黒田：生活費は高いです。不動産が高いのです。家とかそういうものが高いですから。観光地というのはどこでも物価は高いのですが、給料は大して変わりません。それが実情です。ですから、困ります。困っている人がまだ多いのです。でも、健康保険などはほとんどの人が入れるようになっていました。現在、アメリカでは6人に一人が健康保険に加入できていませんが、ハワイ州はほとんど100%加入しています。というのは、働いていれば、従業員が20人以上の所の雇い主は健康保険の半分を出さなければいけない。

———：日本と一緒ですね。

黒田：そういう制度になっています。また、働いていない人でも、それなりの手続きを踏めば誰でも安く保険に入ることができるという制度になっています。ただ、ハワイの経済というのは、結局「戦争経済」です。真珠湾でもっているわけです。

———：やはり国防省の出すお金が随分大きな財源になっているということですか。

黒田：そうです。それが問題です。だから、いつ、どうなるかわからない。そこで中東のことに入って行くのですが、1967年の戦争の時に、イスラエルの何かの砲弾がなくなったのです。不足しているのでアメリカに要求書を送って、送ってくれと言ったのです。送ってくれと言ったら、ペンタゴンが「そういう砲弾は、もう我々のところにもない」と言ったのです。「ない」と言ったら、イスラエルから電報が入って、「そんなことを言っても、ハワイのカネオーヒ⁷にたくさんあるから、そこから持ってこい」と言ったそうです。そういう情報網をイスラエルは持っているのです。ペンタゴンが持っていなかった情報か、持っていても与えたくなかった情報かはわかりませんが、それでやむを得ず、送ったそうです。

———：それが第三次中東戦争。

黒田：67年です。そういう歴史があります。それほど当時のイスラエルの情報網が発達していたということになります。

———：ハワイ全体の面積の中で軍用地域というのは結構なシェアなのですか。

黒田：そうですね。原爆が何千じゃないでしょうか。しばらく前、三分の一以上のハワイ

⁷ Kaneohe：オアフ島にある町で、海兵隊基地がある。

経済は軍事基地と軍をサポートする産業によって占められているということでした。

——：じゃあ、軍施設で働いて生活をたてているハワイの人たちも随分多いということですか。

黒田：すごく多いです。

ところで、今日、知ったのですが、私たちの本のはしがきを書ってくれた人が、アメリカ人なのですが、元 MIT の教授だったのですが、亡くなったと。ヘイワード・アルカー Hayward Alker という人ですが、彼は国際学者です。このニュースが入ってきたのです。恐らく別荘地で夏休みを過ごしていたのでしようけれども、急死したそうです。彼が大学院の学生時代、プリンストン大学で一夏一緒に過ごして、50年近くなるわけですが、もう我々の年齢になるとそんなニュースばかりです。急死と言っていたので、恐らく心臓関係の病気か事故死か、何でしょうね。Japanese Culture in Comparative Perspective⁸という、林知己夫さんという、統計数理研究所の元所長ですが、彼と一緒に日本の文化について書いた本があります。彼は国民性の研究というのを 1953 年からずっと 5 年毎に、どのように日本人の考え方が変わってきたかという全国調査をやってきました。その調査の英語での報告書のような、報告書ではなく本なのですが、それを一緒に書きました。その林さんも私がここに来ると同時に亡くなって、日本語訳を出そうと思っていましたが。しかし出す前に、はしがきを書ってくれた人と、共著者が亡くなってしまいました。

⁸ *Japanese Culture in Comparative Perspective* by Chikio Hayashi and Yasumasa Kuroda, foreword by Hayward R. Alker, (Praeger, 1997) .

第2章 アメリカでの教員生活 ：差別と政治的圧力

アメリカでの教員生活：教員の評価査定方法など

———：黒田さん、日本からアメリカに発たれたのは何年でしたか。

黒田：1951年です。

———：1951年。では、ハワイ大学の先生になられたのは。

黒田：それは、大学としては3つ目です。オレゴン大学を卒業して、モンタナ州立大学で教えて、次がUSC (University of Southern California)、それからUCLAです。

さらにハワイ大学に着いたのが1966年です。私がハワイに着いて数年すると石油危機が到来、アメリカの景気があまり良くなかったのです。それから仕事もあまりなくなってきました。1970年の初め頃までは色々な仕事があったのですが、教授というのは動かないと出世しなかったのです。ところが、その後あまり動けなくなったのでそのままずるずるといちゃったわけです。

———：アメリカの大学の先生というのは、そこに奉職すると契約制みたいになるのですか。

黒田：ああ、違います。違いますというか、こうなっています。まず、4年制の大学ですと、教え始める前に博士号の論文を終えているか、さもなければ、博士課程を全部終えて、あとは論文だけ終えればそれで終るという人たちでない、ほとんどの科目で採用してくれません。そして、最初の教職を得たら大抵の場合、論文を終えていれば助教授です。assistant professorです。それが約5年間続くのですが、アメリカにはtenureというのがあって、日本語でtenureというと「ずっと働く権利」。例えば、性的犯罪などを起こさず、法律を破らない限り、辞めさせることはできない権利です。そういうシステムになっています。ですから5年経って、tenureがもらえるかももらえないかということになります。その時に准教授になれる人もいれば、なれない人もいるかもしれません。でも、とにかくtenureを取らないと、どこか他で仕事を探す以外、手がなくなります。

ですから、大体3年ぐらい経つと後は1年毎の契約です。そして5年経つと、5年間の間に昇格するかtenureがもらえなかったら、お払い箱です、大抵。だから、その間に論文をたくさん出すとか何とかしないと、希望する大学というか、いいところの大学では教えることができなくなります。ですから、それをもらえば「辞めさせる」ということはまず不可能な状態になります。でも、大学が誰かを辞めさせようとしたら、いろいろな方法はありますけどね。

——：やっぱり心証が悪いとまずいですか。

黒田：難しくなるということです。

——：我々の場合、大学でよく非常勤講師というのをこなすのですが、アメリカの大学の先生もやはりいろいろなところで教えるのですか。

黒田：非常勤講師というのはパート、パートというか、いわゆる今、格差で問題になっている人たちの様な給料ですよ。大抵教えても、一回一万円とか、よく知らないけど、べらぼうに安い賃金で、電車賃を出してお昼でも食べたらずいんど何もなくなっちゃうような給料ですよ。とても食べていけない。ですから、まあ、そういうのがアメリカでもどんどん増えているわけです、近年。昔あまりなかったのですが。とにかく大学側としてみれば、安くたくさんの人を雇え、と。ただ、そうすると大学の質が落ちるのです。そういう問題もあります。

それから准教授 *associate professor* ですが、例えば、私の場合、ハワイに1966年に来た時に、准教授だったのです。それで後、5年か6年して今度は教授になったわけですけども、70年か71年のことです。それで、来てから2年目ですかね、准教授でも、*tenure* はすぐにはもらえないわけですよ。もし有名な学者だったら、有名というか本当に有名で素晴らしい学者だったらすぐ与えるから、そうしたら教授になっていますよ、大抵の場合は。教授のステータスがもらえますが、まあ、普通ないですよ。来て2年か3年してそれで *tenure* というものをもらって、それから教授になるのです。それからそこでずっと永久的に在ることになります。

ところが、日本はどうか知りませんが、アメリカの場合、そうは言うものの、出版物とか、教え方とか、大体、アメリカでは基準が3つあります。一つは学術論文というか本ですよ。それから2は「教え方」。それから3は「*community service*」というのですが、あちこちの色々な団体の仕事を無報酬でやるなどして、色々な *service* を。大学の委員会とかでもたくさんあるでしょうし、町の何かの仕事をやっている人もいるでしょうし、そういうことを *community service* と云うわけです。その3つが判断基準なのですが、私が知っている限り、同僚の *friendship* というか「好き嫌い」も大いに関係してきます。例えば本を見ても、一人の人は「こんな本は全然学術的でもなんでもない。全然価値のないものだ。」という人もいますし、同じものを見て「これは本当の宝物だ」という人もいます。特に文学なんかそうですね。詩だとか小説だとか。サイエンスというか、理工学部だとちょっとそれは難しいかもしれませんが、そうでない分野というのは大抵いろいろなことが言えるわけですよ。ですから、好き嫌いによってだいぶ苦労している人たちが沢山いますよ。

そして、例えば私たちの学部でも起こったのですが、ある教授が学部内の有力者には好かれているのですが、全然本も出していない人がいて、学校側は彼を教授にし

たのですが、何て言ったかと思うと、「彼は皆がいろいろなことを議論する時に、非常に critical な、重要な役割をなして、我々や大学院生の大きな刺激となっている」と。「それで我々は彼のおかげでこういう研究成果を得られることができた」と。「みんな彼のおかげだ」と言うのですよ。

日本はどうか知りませんが、ほとんどのアメリカの大学はそうですよ。それから、方法だとか理論によって、日本の経済学でも何でも、マルクス経済とかいろいろ…、そういうわけです。でも中東の場合、今、結局、イスラエルに対する態度が大きく影響してしまうのです。

大学生活とイスラエル

———：それはハワイ大学でもやっぱりそうなのですか。

黒田：はい。私はハワイ大学には、大学院の学生時代の友人に招かれて行ったのです。たまたま彼は Marshall Goldstein というユダヤ系だったのです。彼はユダヤ系だけど、全然そういうことにはかまわない人だったのです。そして、その頃の私のワイフがパレスチナ人だということを知っていたのです、が、そのことには頓着なく招待してくれたわけです。ところが彼がいるうちは良かったのですが、彼は2、3年したら、ハワイを出て行ってしまいました。政治学部の約半分の同僚がユダヤ系でした。まあ例外的なものもいますけども、イスラエルの問題になると、大抵の合理的なりべラルな人でも急に右翼になっちゃうのですよ。それも最右翼に。シャミール政権を支持する反パレスチナ系の考え方ですね。それが中東の研究をして一番の苦労でしょうね。まあ、私も静かにしていれば問題はないのですが、学術論文やマスコミ関連の場でも、黙ってはいられない気性なので問題を起こすのでしょね。

———：絶え間なくそういうプレッシャーがあつて、やっぱり抗しきれずスタンスを変えるということをやらざるを得ないということなのですかね。

石油資本の影

黒田：ええ、だから、中東の勉強をするにおいても非常に大きく影響してくるということです。このような理由が集積されて、結局、私はハワイを出て、日本に来ることにしたのです。何と言うか、いろんな経緯があつたのですが、一番大きなのは、結局…、私は、1990年の初めに国際会議を開いたのです。American-Arab Affairs Council というのがあるのですが、そこから資金を得て、日本とアメリカとアラブ諸国がどのようにしたら今回の平和の兆しをチャンスとして、お互いの経済発展を促進することができるかというタイトルで、各国を代表する大使や、石油業界関係者と学者を招待して開催した時のことでした。湾岸戦争の前です。まだ、始まって

いませんでした。というのは、あのクエートの大使、アル＝サバーフっていうのですよね。アル＝サバーフ・ファミリーの一員である、あの大使が来ました。翌年彼が 1,200 万ドルかけて宣伝会社(ヒル・アンド・ノールトン)を雇い、イラク軍がクエートから撤退するよう、アメリカ政府に対していろいろな宣伝活動を行って、その結果、アメリカが戦争に加わりました⁹。そしてイラク占領軍の兵隊が、クエートの病院のから幼児の保育器を取って行ったこと等の報道をしました。保育器略奪事件を上院議会で、あの時、泣きながら証言した 13 歳の少女がいましたね。戦後、ABC のリポーターが彼女を探したのですが、見付からなかった。結局、彼女はクエート大使の娘だったと後で分かったのです。

クエート大使に加えて、サウジアラビアから石油相代理、ヨルダンやシリアからの代表が来ました。日本からは、今の加藤駐米大使がそのころ公使としてワシントンにいて、彼が来てくれました。それから日本の外務省の中東・北アフリカ局長等が来てくれました。アメリカからはいろいろな要人と石油会社と。そんな連中が来てくれて。例えばジョージ・マックガバン¹⁰をご存知ですか。元の民主党の大統領候補。フランク・カールチなど、共和党の人もいたのですが。それから民主党元大統領候補のアドレイ・スチーブンソン¹¹の孫ですかね。彼、当時、イリノイで日本の会社の顧問弁護士をしていました。とにかくそういう方が来ていろいろ議論したわけです。

その会議ですが、複数の団体に co-sponsor という形で支援していただいた方がいいと思ったので、ハワイ大学とホノルルにある外交問題評議会に共催して頂くという形式をとりました。自由業、ビジネス、知識人等から成る団体です。ハワイ大学総長には、歓迎と開会の辞と、少額でも結構ですから財政面での援助をお願いしたいと言うと、「ああ、いいですよ」という返事でした。「co-sponsor にもなって、いくらかでも頂けますか」と聞いたのです。彼が 3,000 ドル出しましょうと言ってくれました。3,000 ドル出してくれても、ワシントンやあちこちからファーストクラスで有名人が来るのでいくらにもなりません、とにかくありがとうございます、と帰ってきた。それが、会議が始まる二ヶ月ぐらい前の話です。そして会議が始まる 2 週間前に、もうホテルに予約のお金を入れなければいけないのでお金をもらいに行ったら、いなくて、秘書が出て、「悪いけど、プロフェッサー黒田、私たち 2,000 ドルしかないのですが、よろしいですか」と言うのです。「いや、頂けるなら、そ

⁹ この際には、the Rendon Group, Neill & Co., Hill & Knowlton, the Wirthlin Group などのさまざまな PR 会社が使用された。

¹⁰ George McGovern (b.1922) : 民主党、元サウス・ダコタ州選出の上院議員。

¹¹ Adlai Stevenson (1900-1965) : 民主党、1952 年と 56 年の大統領選民主党候補。

れはいくらでも結構です」と言いました。どうしようもないですよ、そんなに遅くなってそんなこと言われたって。それで、まあ会議は無事終わったのですが。何故、彼が約束した額を出さなかったかを知らないでいたら、総長の下で働く友人から真実を聞くことができました。「何が起こったのか。3,000 ドル約束されていたのに 2,000 ドルしか頂けなかった」「いや、本当に彼も悪いと思っていたのだけでも、実は何月何日に国際会議が行われるという記事が新聞に出ていて」という話になって。そうしたら、ハワイ大学にはいつもお金を出してくれる大口の寄付者、何万ドルというお金を毎年くれる人たち。そういう人たちから沢山の手紙を頂いて、「黒田のような奴が関係している、イスラエルを入れてくれないような会議を大学が共催したら、お金を今後、一切あげないからな」ということになったそうです。総長自身ユダヤ系でもあるので困ったと思いますよ。まさか開会の辞も述べられない、お金も全然あげられない、ということになったら大変なことになるし。色々な人たちが来るのも公表していましたから。そこで彼の苦肉の策が、2,000 ドルにすると。それまでにも色々なことがありました。正式には発表されていなかったのですが、イスラエルの有力紙「Ye'diot Achronot」の記者夫妻は会議に出席しておりましたし、イラン人の友人からも強い批判を受けました。とにかく、有力政治家、マスコミ、学者を交えた国際会議を企画し開催すると、外部に発表しえない種々の微妙な問題が浮上します。日本の元首相、閣僚をはじめ各国の要人を交えた会議となると、FBI 等と連絡してセキュリティーの準備等々、学者だけの会議では想像しがたい問題に直面しました。

給料差別

1993 年のアメリカ本土から来た調査団の調査によると、有色人種のハワイ大学教授の平均給料が低かったのです。また、女性の平均給料が 3% 男性に比べて低いということも分かりました。では、Asian, Pacific Islanders の子孫の人たちの給料はいくらですかと聞いたら、同じ年数の経歴と、同じぐらいの学術的貢献をした人が、白人の男性と比べて実は 8% 低かった。私もその網に入っていたわけです。そこで、懇願書を提出して 8% のうち 4% ほどの平等化は実現しました。ハワイ人口の三分の二は有色人種ですが、教授は三分の一位です。大学院生だったときのことで、学生自治会議員の一員として大学キャンパス内に存在するフラターニティとソロリティ¹²の人種・宗教差別に対して反対して、5 年以内に差別廃止をしない場合は、大学の一部としての存在を否認するという議案を提出したこともありました。私な

¹² fraternity (男子学生用) および sorority (女子学生用) と呼ばれる、おもに社交性の育成を目的とする秘密結社的な学生団体。全国的な組織網がある。ギリシャ文字の二字か三字を会名として使用し、会員は住居を共にする。

りの平等への闘争を続けてきたわけですが、その結果が大学全体の迷惑になるようなことは長くは続けたくなかったので、ハワイから去ることにしたのです。

ハワイから東京へ

あまり公表するようなことではないのですが、なぜハワイみたいな素晴らしい天候のところから、こんなに混雑した物価の高いところにやってくるのですかとよく聞かれるのですが、そういう政治的な理由もあります。それも中東をたまたま専攻の一つとしていたおかげでこうなったのです。そういう弊害もあるわけです。それと同じことがこれから中東を勉強したいと言う人たちにも起こりえるし、仕事を見つけている人にも起こるわけです。

米大学の外国人教授、外国語

——：ハワイ州立大学ということなのですが、給料の査定方法は、どのようになっているのですか。制度的に何年目でどういう経歴でということではなくて、やっぱり上の人の印象評価が重要だったりするのですか。

黒田：いや、上の人だけではないですよ、ハワイでは。私たちの学部は、ある意味では非常に民主的なのですが、大学院や学部の学生も入ります。先生の評価についても、それは先生が助教授から准教授に上がる時もすべて。委員会があって、その委員会、学部生と大学院の学生の代表と、教授たちの代表による評価をまとめます、それが一つ。それから学部長の評価が一つ。

——：でも統計的にはやはりエスニックの問題に遭ってしまう。

黒田：そういうわけです。ただし、「弊害」だけでなく、いいところもあります。中東を勉強するのに日本よりもいい環境もあります。私が例えば「良い」と思ったのは、日本はそうでないらしいのですが、アメリカの場合は、中東だけではなくて日本の研究と中国の研究も、アフリカの研究も皆同じですが、土地の人を大学に呼んで、その土地の人を常勤の教授として、研究員として迎えてくれるということです。そういう人の数が相当いるということです。東京大学なんかはどうなのですか。そういうところは。

——：いや、それはいろいろとされていますが、だめですね。

黒田：客員教授というのはどこの大学にも、どこの国にもあると思うのですが、今まで外国人が国立の大学に入れませんでしたよね。東大もそうですよね。何年前までですか、tenure はもらえませんでしたよね。

——：そうです。今、私の勤務する東京外国語大学のアラビア語学科はアメリカ人の教授がいます。だから、今、そのtenureのレギュラーな先生が登場してほぼ10年ぐらいですね。

黒田 : それで、結局、アメリカだと、そういうのが相当数いるということが日本の大学とちょっと違うところなんです。だから言語なんかを習う場合も、ずっとその方がいい場合があると思います。それから、私も勉強し始めてわかったのですが、中東のことを勉強すると、英語で書かれているものが非常にたくさんあるのです。日本語で書かれているものという、限定されていますよね。ですから、そういう点でアメリカだったら、母国語を使って資料を読むということができますし、実際、イスラムにしても何を勉強するにおいても、そういうコミュニティーに行って勉強することもできるというのがいいでしょうね。日本だと、まあ 1972 年以降はイスラム教徒が増えましたが、それまでは極僅かでしたよね。ですから実際そこに住んでみるとか、そういうことではできなかったでしょう。でもアメリカで、もしそういうところへ行きたかったら、例えばミシガン州のデトロイトなどはたくさんのアラブ人がいるとか、ユダヤ系だったらニューヨークへ行くとか。そういうことができるということです。トルコの勉強にしても何にしても、大抵はエスニック・コミュニティーというのがあります。そういうのは日本ではありません。そういうところはアメリカの方が優れています。

それから以前と比べると、大学院の制度が緩やかになってきました。1950 年代、私が大学院に行った時代は、大抵の大学院で外国語が二つか三つないと博士号が取れなかったのです。UCLA なんかは中東を勉強したかったら三つです。ヘブライ語、アラビア語、トルコ語とか、三つの外国語をパスしないとそちらの方向へ進めなかった。私は政治学ですが、政治学で博士号を取るとしても外国語二つです。それが今、全然なくなっているのです。現在 UCLA ではどうか知りませんが、他の大学、私たちの大学ではほとんどなくなっています。外国の勉強をするにはどうか知りませんが、政治学や社会学関係はゼロです。アメリカも、いかに標準というか最低条件が変わってきたということでしょうね。日本はどうなのですか。変わって来ましたか。

——— : 相変わらず頑固に残っています。文学部系のところは。政治学とか社会科学はどうでしょうかね。

黒田 : ところどころの大学では社会科学系では、外国語の代わりに統計学を取るとか、そういう方法論ですか、方法の学問を取ってそれをパスすると、博士号を取る資格を得るということになっています。

第3章 中東との出会い

ヨルダンでの調査から始まる中東との出会い

——：話が変わりますが、黒田さんが中東学に開眼したのは、いつ頃で、どのような経緯だったのでしょうか。

黒田：最初は私がたまたまパレスチナ人と逢って結婚したからです。それが1960年です。61年に結婚して、それから少しずつです。それまでは正直言って全然知りませんでした。それからいろいろなことを勉強しました。最初の調査はパレスチナ人の高校生の調査で、ヨルダンでしました。

——：あのハリーム・バラカート¹³と一緒になされた調査ですね。

黒田：だと思います。その頃が最初です。あれはちょうど Black September¹⁴の頃かな。最初のテロ事件が起きた頃ですよね。その頃、freedom fighters とかいろいろ言われたのですが、それが最初です。そのきっかけから、その結果の一つが Middle East Journal (Summer 1972) に載ったのです。これは、オーストラリアのキャンベラで開かれた国際オリエンタリスト学会で発表した若いコマンドーに関する因子分析結果の論文でした。

——：67年の中東戦争以降、パレスチナ情勢はかなり変化しました。例えばブラック・セプテンバー以前の68年3月に、ヨルダンの難民キャンプに攻撃を仕掛けたイスラエル軍がゲリラによって撃退されるということが起こりました（「カラマの戦い」）。それを境にしてパレスチナ難民は沈黙を破って圧倒的に動きだしたわけですが、そのようなことはアメリカ側ではどのような衝撃として受け止められたのでしょうか。そのことと関連して思い出すが、「カラマの戦い」から3ヶ月後に、米国内でサーハン・サーハンというアラブ系移民がケネディを暗殺しますよね。

黒田：ロバート・ケネディですね。

——：サーハン・サーハンはもともとエルサレム出身のパレスチナ難民で、50年代にアメリカに移住し定着したのですが、彼が従業員として働いていたホテルの会場へ、次期米大統領候補で遊説中のロバート・ケネディがやってきてイスラエル擁護の演説をした。それをたまたま耳にして自分の祖国が踏みつけにされていくとの怒りから犯行に及んだと、獄中でのインタビューで彼が述べているのを読んだことがあります。

¹³ Halim Barakat (b.1933)：レバノン系社会学者、小説家。

¹⁴ 1970年9月にヨルダンで起こったパレスチナ系ゲリラによるフセイン国王暗殺未遂事件に端を発し、ヨルダン軍がPLOアンマン事務所を攻撃するなどして緊張状態が局限化した。一連の事件は、1971年7月のPLOのレバノンへの追放で終わる。

す。

黒田 : でも、彼がやったという完全な証拠がまだ出ていないのです。

—— : そうですね。あの時期は、ベトナム戦争が泥沼化する一方で、黒人公民権運動指導者のキング牧師が暗殺されるというように、いろいろな衝撃がアメリカを襲っており、そうした中でパレスチナ難民がらみの予期せぬ出来事がもちあがってきたことは、アメリカの中東研究を大きく変えるきっかけになったのではないですか。

黒田 : 忘れられるよりは嫌われる方がましだというようなね。

パレスチナ人の妻に対する差別

—— : そのときはもう奥さんとは出会われていたのですよね。

黒田 : ええ、出会ってましたよ。

—— : 奥さんも研究者でいらしたのですか。

黒田 : ある程度ね。

—— : あの 67 年戦争のアラブ大敗北の後に、エドワード・サイードも含めたアメリカにいる一連のアラブ知識人や研究者が共同執筆して一冊の本が出ましたよね¹⁵。イブラーヒム・アブールゴッド¹⁶の編集による。

黒田 : ああ、アブールゴッド。ええ。

—— : サイードもあの本の出版以降に一気に発言し始めますよね。

黒田 : それまでは、ジョセフ・コンラッドの英文学です。

—— : 奥さんとの最初の出会いはなにか衝撃を伴うものだったのですか。

黒田 : ええ、それまでうすうすはわかっていたのですが、彼女はエルサレム生まれで、たまたまキリスト教徒でした。色々なことがありましたよ。私、USC に雇われてモンタナから出て 1964 年にロサンゼルスに行ったのですが、行ってから間もなく、2、3 日して、同僚の一人がやって来てまず挨拶を終えると、「ところで、奥さんがエルサレムからの人だそうだけど、今度、一度夕食に招待したいと思っているので、忘れないうちに電話するから」というのです。「ありがとうございます」と言ったのです。私がモンタナで学部長にインタビューされた時に妻もたまたまいたのです。モンタナ州の州都でのことなのですが、たまたまそこを通ったのか来てくれて、「奥さんがいたら一緒に連れて来い」と昼食に家内を呼んでくれたのです。それで彼がたまたま「奥さんがエルサレム生まれだ」ということを言ったのらしいのです。夕食に呼ぶと言ってくれた人は、エルサレム生まれだったらユダヤ系だと思ったので

¹⁵ The Arab-Israeli Confrontation of June 1967: An Arab Perspective, edited by Ibrahim Abu-Lughod, (Northwestern University Press, 1970).

¹⁶ Ibrahim Abu-Lughod (1929-2001): パレスチナ系経済学者。歴史学者 Janet Abu-Lughod の元夫、文化人類学者 Lila Abu-Lughod の父。

しょうね。しかし、待てど暮らせど、その「招待状」というのが来たことがないのですよ、今もって。もう 40 年経っているかなあ。そういうこともありましたね。大変勉強になります。そうしたら、後でしたか、彼はシオニストとして、アメリカの議会でもロビー活動をしたことがある人だったとわかりました。

———：奥さんも留学生として来られたということですか。

黒田：そうです。

———：じゃあ、結局、第三次中東戦争でエルサレムが占領され、奥さんはあちらの居住権というのが。

黒田：ええ、ビールゼート¹⁷というところです。

———：ああ、ビールゼートですか。

黒田：あそこに住んでいたのです。だから私も何回か行っています。ご存知ですか、大学に行きました？

———：知っていました。じゃあ、ハンナ・ナーセル¹⁸なんかと親しいのですか。

黒田：ああ、ハンナ・ナーセルは前のワイフの親戚ですよ。

———：そうだったのですか。あの人はイスラエル占領当局によって長いこと国外追放されておりましたよね。1980 年に東京で、板垣雄三さんらが中心となり毎日新聞が主催して「エルサレムを考えるシンポジウム」が開かれ、ハンナ・ナーセル氏、ロマヒー・アル＝ハティーブ元エルサレム市長など、追放されてヨルダンに身を置くパレスチナ人を主力とするデリゲーションが来日して、エルサレム問題について示唆に富む報告がなされました。

ヨルダンでの経験

黒田：そうですか。ともかく、そういう遍歴を経て、嫌なこともありましたし、いいこともありましたし、いろいろです。それから、これは必ずしもアメリカではないのでしようけども、どうしたら新しいコンタクトを中東で作ることができるかということですよ。数人の人にそういういろいろなことをやったのですが、一つだけお話をすると、ある時、急にフセイン国王がホノルルに来たのです。3 日か 4 日の予定で。大学に来て講演をしていただけますかという招待状をホテルに送りました。カハラ・ヒルトンというところで、天皇陛下も泊まるような有名なホテルで、そこに泊まっていました。

しかし、ただ手紙を送るといっても見も知らない教授が送ったって見てもくれないだろうから、手紙に大きな花束、普通のよりもずっと大きいやつでね。王様が見て

¹⁷ パレスチナのラーマッラー近郊にある町、Birzeit University がある。

¹⁸ Hanna Nasser : Birzeit University 元学長、ベツレヘム市元市長。

も恥ずかしくないような大きなのを付けて送ったのです。でも何も返事がないのです。それから3週間くらい経って、アンマンから手紙が来て、「招待状をいただきながら返事も出さずに失礼しました。今度ヨルダンに来られる機会がありましたら、是非、お寄り下さい」と。そしてたまたま行く機会があったので行くことにして、フセイン国王に手紙を書いて。手紙の交換が2、3回あって。それからヨルダンの元通商大臣で大学教授をしていた人とも連絡を取りました、名前が出てこないのですが、東京外国語大学にもこの間、来ましたね、去年。

———：ああ、アブー＝ジャービル¹⁹ですね。

黒田：アブー＝ジャービルとは1970年ごろから会っているのです。彼のところにも一緒に訪ねていったのです。私、事前には知らなかったのですが、アブー＝ジャービルは大きな豪族の一員なのです。ヨルダンのビール製造業のほとんどは彼の家の、アブー＝ジャービル・ファミリーが所有しています。まあ、とにかく彼のところに連絡してくださいと王宮にお願いしておいたのです。そうしたら、連絡が来て、「今回はどうしても会えないけど、この次来たら必ず連絡してくれ」とアブー＝ジャービルを通して連絡がありました。それからまた次に行く機会があったので、手紙を書きました。そうしたら、「今度は空港に車とショーファーを送るから、滞在中は自由に使ってください」と返事が来ました。すると、着いたらちゃんと車が待っているのです。銃を持ったおっかないおじさんと、カーキ色のベンツでした。どこにでも行けてよかったですけど。

そしてパレスチナ人と結婚していたというのも良かったのでしょう。しかし国王は死海かどこかに行ってしまうと会えないので、弟のハサン王子と会うことになったのですが、招待状の宛先は、彼女がパレスチナ人でも私だけなのですよね。彼女の名前はないのです。そういうところは中東社会です。そういう経験もしました。そういう経験を通していかにまだ女性蔑視の社会か、アメリカとはそういう点は非常に違うということを痛感しました。

それから、今だったらネットでこうパッと「この人どんな人だろう」と調べることができますが、その時分どういうネットワークがありますかね。ああいう人たちというのは恐らく諮問機関があるのでしょうかね。調べて安全だったら積極的に扱うし、ということだと思のです。そういう経験もしましたね。そういうこともハワイに住んでいたからできたことで、そのような方法で2、3人の人にコンタクトを取って、ほとんど成功しています。いつもというわけではありませんが。そういった点、英語だと、英語の社会の場合は便利です。

———：ハワイ大学にはアラブ系の人はいなかったのですか。

¹⁹ Kāmil Abū Jābir：ヨルダンの元外務大臣。2006年来日。

黒田 : いません。日系すらも。現在は、政治学でも、私たち教授は全部で 27、8 名いるのですが、私がいたときは日系人が 3 人いました。ところが今は一人もいません。ゼロです。そして学生の数を見ると、日系人が三分の一ぐらいです。白人は少数です。あと中国系だとか。だから教授連は 80%か 85%白人です。で、有権者人口から言うと、日系人と白人が大体同じです。4割近くです。そのため、選挙に勝とうと思ったら、日系人と白人系の占める投票を得ることができれば選挙に勝つことができます。ですから、相違点というのは沢山あります。学者として生活していくにおいて、アメリカ社会と日本社会とは。その点、日本の社会は非常に自由です。まあ、非常にという用語弊があるかもしれませんが、あまりそういう心配せずに物事を決めることができる。

シオニストの影響、石油資本の影

それから、いかにシオニストの影響が強いかということを知る上において、一つだけ私が報告したいことがあります。アメリカのイスラエル援助金というものは膨大なもので、また増やすプランも出ています。また増えるらしいです。本当の外国の援助金、ODA というお金ですか。あれは私が公的な数字を得た時は 30 億ドル。それが、一年間の援助金で、そのうちの約半分が軍事、約半分が経済援助だったので

す。

ところで、だいたい official aid (公式援助) は約 30 億ドルだけでも、現在どのくらいのお金がアメリカからイスラエルに動いているのかとアメリカ議会でも特に予算面で有力な政治家として活躍していた人に聞いたのです。そうしたら、70 億ドルと言いました。2 倍以上です。それはどういう名目で送られているのですか、ということを知ったら彼は答えない。だから、「それは、研究費とか新兵器を発達させる為の公的な資金の名目ですか」と聞きました。その人は、意味を明確にすることを避け、単に肯いてくれました。マスコミも報道しない知る由もないことも聞きました。実際はそれだけじゃなく、イスラエルへの経済援助は新しい fiscal year (会計年度)、アメリカは 10 月かな、第一期に全額が送られているとのことでした。第一期、あれは普通四期に分かれてお金が送られるわけですが、15 億ドルのお金が送られるとしたら、年の最初に 15 億ドルというそれだけのお金があったら利子だけでも相当ありますよね。それを全額最初の月に送られるのはイスラエルだけです。どうしてそんなことが可能なかと聞いたのです。そんなことは法案に書けないだろうと。他の国は皆四期ごとにやっている。国連なんかはいつになっても払ってもらえなくて困っているじゃないかと言ったら、「いや、それはわけない」と言うのです。「これは amendment (修正案) として通過しなければいけない法案の appendix (追加事項) として、最後にぱっと入れる」と言う。そういうことをやって

いる。だから実際のイスラエルのお金はその頃で 70 億ドルです。

——：だけど、その 70 億ドルのうちイスラエルの一般家庭に回るのは限られているわけで、圧倒的に武器に行っているわけですね。

黒田：武器とか入植者にです。

——：そのおかげでイスラエルが武器を確保して、それは結局アメリカのディーラーに戻るわけですね。だから、これは結局、アメリカの武器資本がめっちゃくちゃ儲けるというからくりですね。

黒田：ネオコン・シオニストでジャクソン上院議員の事務所で働いた人がいましたね。ジャクソン議員²⁰は *Senator from Boeing* (ボーイング社の上院議員) といわれるほど航空機会社のボーイング社と密接な関係にありました。軍事産業です。ネオコン・シオニストのリチャード・パールとエリオット・エーブラムスはそこで働いていたのですが、彼らが、シカゴ大学のレオ・ストラウス教授の下で博士号を獲得したウォルフォウィッツ²¹だとか、ああいう連中と一緒にあって、ブッシュ大統領に先制攻撃を提言したわけです。あれは先制攻撃をかけると最初 1992 年に提言するわけですね。それをブッシュ大統領は取り上げなかったのですが、息子のブッシュ大統領は取り上げてくれました。ネオコンと関係のあった軍事産業とブッシュ大統領、チェイニー副大統領、ライス長官などもすべて石油会社に関連しているという背景を見ないと、何故、真実性のない理由でイラクに先制攻撃をしかけたか見えてきません。

——：そうすると、アメリカの、第二次大戦の前ぐらいから、戦争中、戦後のパターン、つまり先端技術を開発して巨大産業化し富につなげていくという仕組み、これが彼らユダヤ系の頭脳とマネーでやりくりされていて、さらなる金儲けにつながるという仕組みですね。

黒田：だから、結局、ユダヤ系の人たちや団体が他民族に比べていろいろな献金をするということは、政治献金という名目の投資なのです。ハワイ大学もそうなのです。ですから投資をすることで、僅かなお金で民主党も共和党も買っているわけです。クリントン夫人も中東和平について、はじめは非常に客観的な態度を取っていました。PLO にもある程度友好的な態度を取っていたし。しかし、彼女は大統領になる可能性が出てきて、ニューヨークから上院議員になったとたんに態度が変わりました。

——：ユダヤ人コミュニティーのトップの重要性が、アメリカのユダヤ人コミュニティー全体を、つまり下々の人々の生活ぶりをも潤わせるということにつながっているのでしょうかね。

²⁰ Henry Jackson (1912-1983) : ワシントン州選出の元上院議員。

²¹ Paul Wolfowitz (b.1943) : ユダヤ系、ネオコンの論客、前世銀グループ総裁、ブッシュ政権(父)時代の国防副長官。

黒田 : でも、ウォールズ・ストリートも相当ユダヤ教の人たちが占めています。金融界です。

日系人はそういうところには多数入っていません。ユダヤ系の人たちは外見から見分けるのは困難です。日系というのは見ただけで東洋人だというぐらいはすぐにはわかってしまいます。だからそういう点も、日系人と比べるとユダヤ系アメリカ人のいいところというか、特典は受け入れられやすいところでしょうか。でも、彼らが嫌われていることは確実です。今、議会は 100%シオニストの支持ですが、いつ、どうなるかわかりません。

左派ユダヤ人との関係

—— : 黒田さんは、民主的な研究者としてアメリカで活躍されていると、例えばアラブ系のコミュニティなどとはいろいろなつながりができてということですが、ユダヤ人とのつながりが難しいというのはありますか。

黒田 : ありますよ。でも、両方できると思うのです。だから私たちはヘブライ大学にも行ったのです。私がヘブライ大学に行った理由というのは、先程お話した 1990 年の会議のことで私が anti-Semitist (反ユダヤ主義) だと決めつけられ、大学内でもそう見られたため、ある程度はその傾向を鎮めなければいけないということが理由でした。またベン・アミィ・シローニ先生²²にずっと前から「ヘブライ大学に来ないか、来ないか」と言われていたので、彼の招待を今回受けることにして、私が anti-Semitist ではないということのある程度証明して、迷惑をかけた総長などに見せようかと思って受け入れました。それで行きました。そしてあちこちで色々な人に会って話し合いました。ウエストバンクでアイアン・フィスト・ポリシー (Iron fist policy) を提唱したイスラエル人のエジプト文学者にも会いました。いろいろな人に会いました。Palestinians are entitled to a home too, but not two homes. Jordan is their home とかなんとか言っていた人もいました。

私が一番感心したのは、イスラエル陸軍の元情報将校かな。何と言ったか、名前。長い名前の、国際関係学者、ヘブライ大学にもいたし、陸軍士官学校でも教えたこともある、何と言ったか、とにかく彼にインタビューに行ったのです。彼はフレンチヒルのマンションに住んでいました。私が書いていた本のデータを集めるために、彼に聞きに行きました。彼は、私を書斎に案内してくれてコーヒーを出し、歓迎してくれました。その日の朝のエルサレム・ポストに「イスラエルの陸軍士官に対する調査の結果によると、大部分のイスラエルの陸軍士官は、イスラエル軍の占領軍がウエストバンクから撤退しても、イスラエルの安全には何の影響も関係もない。

²² Ben-Ami Shillony (b.1937) : 日本史を専門とし、ホロコーストの被害者でもあったヘブライ大学教授。親日家、日本に関する著書が多くあり、邦訳もある。

イスラエルのセキュリティーはしっかりしているので何の心配もない」という意見であるという記事が載っていました。何で陸軍、特に士官の連中がこんな素晴らしい意見を持っているのだと私は聞きました。軍人というのは非常に愛国主義者というか、どちらかという右翼というかそういう人だと思っていました。これは私の偏見だったかもしれません。そうしたら、彼が「いや、私がそう教えたからだ」と答えました。“I taught them”（私が彼らに教えた）と。「ああ、こんな素晴らしい人がイスラエルでもいるのか」と思いました。ですから、彼の言葉には非常に感動しました。そして彼はハワイ大学にもいつか来たいというのです。彼はその頃もう80過ぎていました。

———：ハルカビですな²³。

黒田：ああ、ハルカビ、そうそう。来たいというのです。「アメリカへは行ったことがあるけど、ハワイはいいところと聞いているから」と言ったので「ああ、そうしたら講演口でも見つけてみましょう」と言ってちょっと調べてみたら、イスラエル・シオニストのスピーカーは歓迎するけれども、彼のような人はどうも、大学当局も歓迎しないわけですよ。そんな人を招待したら、シオニストの圧力団体が問題視する、と。私は、これはイスラエルのPRにいいと思ったのですが、こんなにイスラエルには自由があって学問の自由も立派に存在するのに、アメリカにはなぜないと言おうと思ったぐらいです。ですから、イスラエルの人たちとのコンタクトも上手く行きました。

パレスチナ人とのコンタクト：チュニスのPLO事務局での出来事

もちろんパレスチナ人とのコンタクトも上手く行きました。一つだけ私が非常に恐ろしかったのは、チュニスでアラファトに会いに行った時のことです。PLOのオフィスを通じて会うことになっていました。そして行ったら、訪問する朝にホテルに電話が掛かってきて、「今朝、会うはずになっていましたが、今朝の4時まで会議があって、急遽どこかへ、アルジェリアだったかな、に行かなければいけなくなって、もう飛行機で飛び立ったので会えなくなりました。代わりにアブー・アラ²⁴がお会いしますので」ということになりました。それで、10時ごろに行きました。タクシーで行って、指定されたブロックで降りたら、普通のチュニスの白いベネチア風の大きな家がありました。タクシーから降りて、歩道に立って番号を見ながら

²³ Yehoshafat Harkabi (1921-1994)：イエホシャファト・ハルカビ、元軍人、大学教授、パレスチナ国家を認める修正主義的歴史観で知られた。著作の邦訳に「イスラエル運命の刻」、奈良本英佑訳、(第三書簡、1990年)がある。

²⁴ Abū 'Alā or Ahmad Quraī (b.1937)：PLOメンバー、ファタハ幹部、パレスチナ自治政府前外相。

チェックしていたら、あっという間に数人の機関銃を構えた兵隊が私を囲んで立っていたのです。あっという間に、どこから出てきたかわからない速さでした。あちこちから出てきたのでしょうか。驚きました。そうしたら、にこにこ笑いながら誰かが入り口から出てきて兵士たちに「お客だから心配しなくていい」と言ったのです。あの時は、本当に驚きました。目の前に機関銃をね。一つじゃないし。

——— : それは何年ですか。

黒田 : それは、マドリード会議の半年前です。マドリード会議は何年でしたっけ。それは、Middle East Conference がチュニスで行われたときのことですよ。International Middle East Conference です。

——— : 91年です。

黒田 : その時にパレスチナをマドリードで代表した、ヨルダンのアブー＝ジャービルが来ていました。その頃、まだ教授でパレスチナの代表になるなんていうことはまだ考えていなかった頃です。

——— : PLO 事務局は海の近くでしたね。僕はアブー・イヤード²⁵のメモワールを読んでいて、さらに詳しい話を彼から直接聞くために87年はじめにチュニスへ行きました。そのときも武装警備の厳しさは相当なものでしたが、しかし同年暮れに、第一次インティファダがはじまってまもなく、アブー・ジハード²⁶もアブー・イヤードもあそこで暗殺された。黒田さんが行かれたのは暗殺の後だったと思います。

黒田 : とにかくあれほど驚いたことはないですよ。イスラエルでもそんなことは全然なかったです。ただ、驚いたのは、イスラエルでは市内をよく歩いたのですが、あるとき歩いていたら、ジャボティンスキー・ストリート Jabotinsky Street というのがあって、ロシアから移民のあの人の²⁷。そこに彼が住んでいるかと思っちゃいました。ちょっと恐くなりました。いろいろありますよ。よく人の名前をストリートに使います。アメリカでもあります。前にプリンストンに行ったとき、アインシュタイン・アベニューというのがありました。そういうところで勉強したいですよ。ジャボティンスキー・ストリートは嫌ですけどね。

民族ごとのネットワーク、書かれないルール

——— : 黒田さんはいろいろなところと交流の邂逅を作っているという意味では大変なお仕事をしてこられた。

黒田 : そうですね。そしてアラブ人というのは家族を非常に重要にします。だれだれの親

²⁵ Abū 'Iyād or Salāf Khalaf (1933-1991) : PLO メンバー、ファタハ幹部。

²⁶ Abū Jihād or Khaḍīr al-Wazīr (1935-1988) : PLO メンバー、ファタハ幹部。

²⁷ Ze'ev (Vladimir) Jabotinsky (1880-1940) : ロシア系シオニスト、パレスチナで1931年に武装組織エツェル（イルグン）を結成。

戚だとか。うるさいと言えはうるさいし、私にとってはどうでもいいことです。日本でも昔は重要だったんでしょうけど。

——— : アメリカでアラブ研究を中心にやるとジョージタウン大学とかやはりアラブ系が中心の大学になるのでしょうか。

黒田 : アラブ系が中心のところは皆、アラブ系が集まってくるし、ユダヤ系だったらユダヤ系が集まって来ます。ユダヤ系は多いです。圧倒的に多いです。だから浮かばれないといえば、浮かばれないですね。それで仕事が見つからないのです。そしてやはり大学というのは仕事を得るために、「つて」というか、知っている人を通じて、つてを通じてリクルートされるので、そういう点、ある程度自分の所属する民族によって決められるわけです。私の論文のスーパーバイザーもユダヤ系です。ニューヨークからの。全然、彼はかまわないですけどね。私が結婚したとき彼と彼のワイフが私のところに電報を送ってくれました。“Congratulations to the mating of the Far East and the Middle East in the Far West!” (極東と中東の極西部での出会いにおめでとう!) Far West というのも、モンタナは極端に西部とされているのです。カウボーイとかいますから。そんな電報を受け取りました。

学会はそういうのでつながっているのです。だから中東を勉強するとなると、*opportunity* というのは、どの民族に属するかによって決められるでしょうね。それが恐くもあるし嬉しいことでもあります。そういう風にして、法律上差別は廃止されましたが、今でもハワイ大学では80%の教授は白人なのです。そしてマノア²⁸というところは、戦前、日本人は住めませんでした。それからハワイのワイキキのそばにカハラ²⁹というところがあります。今はお金さえあれば誰でも住めますが、特に日本人は1970年を過ぎて裕福になってたくさん別荘を買ったりしていました。その前、60年代は、日系人はほとんど入れませんでした。そして日系人の女性と結婚したユダヤ系の、誰でしたっけ。ハワイに住んだことがあるのですが、そうです、ジェームス・ミッチェナー³⁰がカハラに家を買って移ろうとした。ところが家を買えないのです。第一、彼がユダヤ系で彼女が日系でしたので。

——— : ユダヤ系というのもあったのですね。

黒田 : ある程度ありました。そういう社会でね。法律には何も書いていません「お前なに系だから」というようなことは。そういうことは目には見えないことなのです。だから恐いです。

²⁸ Manoa : ワイキキの中心街から車で10分ほど、ハワイ大学マノア校がある。

²⁹ Kahala : ワイキキの中心街から車で20分の高級住宅街。

³⁰ James Michener (1907-1997) : 歴史的調査に基づいたフィクションで人気を博した作家。邦訳も多数ある。映画「南太平洋」(1958)は彼のピューリッツァー賞受賞作「南太平洋物語」に基づいている。

———：その地域の、コミュニティーの住民の意識の中にそういうのが入っているわけですね。

黒田：入っているわけです。例えば日本人がアメリカへ行って何を勉強するにしても、特に中東を勉強するにしても、誰のところに最初に行くかによって、その人のキャリアというか、その人の将来が決まってしまうので気をつけなさいということです。最初ユダヤ系だったらずっとそのユダヤ系のコネクションがどんどん広がっていきましょうし。とにかく、両方にまたがってやっていくというのは非常に困難な技です。

———：全く別の世界ですからね。

黒田：経験していますよね。

アラブ移民の成功者例

———：先程、日本人もユダヤ人も同じ頃「移民」をしたとおっしゃっていましたが、アラブ人もレバノン移民をはじめ、同じ時期に入っているわけですが、ユダヤ人のようにはいかなかった。

黒田：そうです。例えばパナムのプレジデントだった人³¹。娘が結婚してヨルダンの王妃になった。彼なんかは成功した例でしょう。政治家だったら、コンシューマー・ムーブメントのナーダーさん³²。彼もレバノンのキリスト教徒ですよ。彼のお姉さんか妹さんが文化人類学者です。パークレーかどこかの優秀な学者です。でもあまりいないですよ。あと上院議員の議長に一度なった、アイルランドの交渉にもあたった、上院の議長だったジョージ・ミッチェル³³も半分アラブ人。ただ、名前がアングロサクソンなので、誰も彼がアラブ系だとは見ない。

シオニスト（ユダヤ）系の献金とパレスチナ問題

ユダヤ系は政界でも一番上にはいかないのですが、彼らは見えないところで非常に民主党への献金どかかをしています。ユダヤ系といっても、皆がシオニストではないことは確実です。大手の選挙資金の相当な額が連邦議員や大統領候補に流れていますが、献金は、一つの団体からではなく名前はいろいろ違うのですが、どちらか

³¹ Najeeb Halaby (1915–2003)：元パン・アメリカン航空 CEO、シリア系移民の子、前ヨルダン国王フセインの第四王妃ヌール（リサ・ハラビー）の父。

³² Ralph Nader (b.1934)：レバノン系移民の子、1960年代に消費者保護運動で一世を風靡した。

³³ George Mitchell (b.1933)：母親がレバノン系移民。メイン州選出の元上院議員。1989年から1995年まで上院多数党（民主党）院内総務 Senate Majority Leader（すなわち上院議長）を務める。

たとえば「シオニスト関係」のお金から出ている場合が多い。
例えば、アドレイ・スティーブンソン。彼の伝記を書いた歴史学者を知っていたのですが、彼の話によると、スティーブンソンは最初は何も知らずに「イスラエル寄り」だったそうです。しかし、スティーブンソンの時代には、大抵は大統領候補になると外国をぐるぐる回って知識を深めてくるのが慣例になっていて、それで慣例に従って、イスラエルにも行った、そしてアラブの方にも行った。そこで彼は「どうもこれはパレスチナ人に正当性があってイスラエル側、我々が援助している国には正当性がなさそうだ」ということを発見し、イリノイに帰ってきた後、そのことを言いました。そうしたらユダヤ系の人たちの反感を買い、ボイコットされ、お金も何も来なくなってしまい、2回目の選挙の時は全然だめだった。だからそういうわけで、選挙にも勝てなくなってしまいます。シオニストに反対したら選挙には絶対に勝てない。黙っていればよかったですね。

ある日本人大使のイスラエルの印象

ある日本の大使、イスラエルにいる日本の大使と昼食を一度一緒にしました。彼がイスラエル大使になった大きな理由の一つは、「私は外務省でイスラエル最良として知られていて、ようやく大使になっていい仕事ができるようになった」と言っていました。そこで「ああそうですか」と言い、「大使になって六ヶ月経っていますが、どうですか、今の心境は思ったとおりですか。どうですか。」と聞いたら、「ウエストバンクにもガザにも行ったけど、私は間違っていた」と言っていました。彼は私が日本人だということを知っているから言ってくれました。

それからもう一度機会があって、別のレセプションで会ったのです。そこで彼がたまたまイスラエルの人たちと話をしているのを聞いたのです。ああ、そうだ、思い出しました。彼が最初に就任した時に、普通来ないような総理、副総理などの人たちが歓迎のレセプションに来てくれて、「思ったより重要な人たちが来てくれて、非常に重要視してくれた」と彼は言っており、「よかったですね」と言いました。そこで「どうですか。その後、あちこちに行ってみた印象は」と聞いたのです。そうしたら、さっき言ったように私に言ってくれたのです。その彼に、イスラエルの人たちが同じように「イスラエルをどう思いますか?」と聞いていたので私は彼の言葉をそばでじっと聞いていたら、彼は“*The longer I stay, the more interesting Israel becomes. I find the history of Israel very interesting. The longer I stay, the more intriguing it becomes.*”（長くいればいるほどイスラエルが興味深いものになります。イスラエルの歴史はとても興味深いと思います。いればいるほど興味がそそられます。）という表現をしていました。彼はさすが外交官だなと思いました。でもそれが本当でしょうね。だから知れば知るほど、何が何だ

か、わかれば真実に近づくことができるということですか。

イスラエルの左派と会う：ペレス、ヨシ・ベイリン

そしてパレスチナ人のことを心配するイスラエル人に会いました。労働党の副外務大臣までやった人、また名前を忘れてしまったのですが、労働党のよく知られた、今も生きている人もいますよね。ノーベル平和賞ももらった。

———：シモン・ペレス³⁴ですね。

黒田：ペレスの愛弟子みたいな人で、政治学の博士号も持っている人。

———：ヨシ・ベイリン³⁵でしょう。

黒田：ヨシ・ベイリン。彼とも会ったのですが、彼とは1時間か2時間、長く話をして、彼は本当にパレスチナのことを心配していました。彼ともう一人の学者、オスロ・トークの最初のきっかけを作った人。誰でしたか。ヤイル・ヒルシュフェルド³⁶。彼も本当によく心配していました。私はイスラエルの外務省にも行ってきたのですが、行ったことありますか。

———：行ったことはないです。

黒田：私は行ってきたのですが、総理大臣の官邸も行ってきました。調べられましたけどね。官邸の周りにはプラカードを持っている人たちがいたりして。外務省のオフィスは非常に質素で、掘っ立て小屋みたいなプレハブみたいな、立派なビルではないです。こんなところでよく外務省の人たちは仕事をしているなど思いました。こんなに強い強力な外交力を持つ国がこんな粗末なビルで仕事をしているかと思い、偉いと思いました。

アラブの印象：汚職、石油

———：それはほとんど反対ですね。

黒田：そうなのですね。アラブの方に行くと。

———：豪邸に住んでいる。

黒田：そうなのですよ。たまたま知っていた外務省の人と、その話をしていたことがあります。ODAなんかで日本の外交官などが来て、彼らのところに呼ばれて、政府の要人のところに行くのですが、行ってみると外交官の東京にある自分の小さいマンションなんかとは比べ物にならないくらい大きい豪邸に住んで、召使までついて、素晴らしい生活をしている。こんな国のために、ODAをあげに来なければいけない、と。それはありますね、本当に憤慨します。

³⁴ Shimon Peres (b.1923)：1994年にノーベル平和賞受賞、労働党、現在第9代大統領。

³⁵ Yossi Beilin (b.1948)：オスロ合意(1993年)など一連の和平プロセスに関与した。

³⁶ Yair Hirschfeld (b.1944)：イスラエルの歴史学者。

汚職などの問題は、あれはひどいです。石油のお金も乱用されているというか流れているのです。あれはベイルートの「汚職なんとか連盟」³⁷の数字によるとべらぼうな数字です。1000億ドルかなんか。50年間に。石油のお金の乱用です。それだけのお金があったら、アラブ全体の一人一人の生活が200ドル上がります。それほどのお金が浪費されているのです。だから、パレスチナを作り直すお金が必要だったら、そういうところからお金を出せばいくらでもあります。残念です。イラク戦争も恐らく。今度、マーリキーが変えられるかもしれないのですよね。結局、石油法がまだ通っていないのですよね。石油法の内容を見たことがありますか。秘密ですよ、あれは。いろいろな speculation (憶測) がなされている。その自然資源法がイラク議会を通過すれば、石油関連の利権の7、8割を握るアメリカとイギリスが益するでしょう。表向きにはなっていないけど、その法律を通せというわけでしょう。通ったら俺達は退陣すると。

——：例えば、クルド地区も、かつての湾岸の首長国みたいに分離独立させるということでしょうか。

黒田：でも、そのことだけは皆が反対しています。各民族が。それで結局、イラクという国がまとまっているわけです。あれが崩れたらもう。どうなのでしょう。

——：まあ、しかし、パイプラインで輸送しなければならないわけで、それが大きなネットワークです。

黒田：アフガニスタンも同じです。アフガニスタンの南部をタリバーンが持っているのですよね。だからあそこはパイプラインが通らないです。

——：だから、これまでの湾岸産油国でやってきたのと同じやり方では、今はできないというように変わりましたね。

黒田：そういうのを勉強するにもアメリカのほうが日本よりも便利といえば便利でしょうね。何を勉強するにも情報が大概、英語ですから。

³⁷ Arab Parliamentarians Against Corruption – ARPAC : Global Organization of Parliamentarians Against Corruption – GOPAC のアラブ地域版、2004年にベイルートに設立された。

第4章 アメリカで学問をすることの困難さ

著作の日本語訳

——：ハワイ大学では中東研究をなさっていたんですか。

黒田：ああ、それも言おうと思っていました。私はもともと日本の研究をやっていました。今でもやっていますが。最初の本が日本のことについての本³⁸で日本語に訳されています。吉川市の研究ですが、それを小林宏一³⁹という、その頃、早稲田で博士号を取っていて今は社会学の教授になっていますが、東京大学社会学部の小林先生という人をご存知ですか。

——：私はちょっと存じ上げませんが。

黒田：健在だと思いますが、相当な歳だと思います。彼が大学院の学生だったときで、今は亡くなっている早稲田の教授だった秋元律郎氏が翻訳してくれました。そしてトルコを専門とする東大の学生で、今、東大に戻っているトルコ専門の…。

——：鈴木董さん。

黒田：専門はトルコですか。

——：ええ、オスマン史です。

黒田：私が何か発表したときです。「黒田先生は日本のこともやるのですか」と言われ、「やりますよ」と言いましたら「私、先生の本を読まされました」と彼は言っていました。「どの本を読みましたか」といったら、「地方都市の権力構造」と言っていました。「それで、今は中東ですか」というので、「ええ、中東もやりますよ」と言いました。そういう関係で両方やっていました。

ハワイ大学での日本研究センター設立

それまでハワイでは日本研究センターというのにはなかったのですが、70年代の初頃まで。それで私が作ろうと思って始めたのですが、そのとき、田中首相時代の日本政府から日本研究のためにという名目で100万ドルの資金を頂きました。それで、そのときもいろいろいきさつがあったのですが、感謝の意を表する為に、田中氏に名誉博士号を与えようと思って奮闘したのですが、失敗したのです。失敗してよかったです。後でああいうことになってしまいましたので⁴⁰。とにかくそれは成功して資金が入ってきた。ハワイ大学で日本語を研究する人はアメリカで一番多いので

³⁸ 「地方都市の権力構造」、Y.クロダ著、秋元律朗・小林宏一訳、(東京：勁草書房、1976)。

³⁹ 小林宏一(1942年生)：現在、早稲田大学客員教授・東京大学名誉教授(社会学)。

⁴⁰ 1976年に発覚したロッキード事件によって、田中角栄は受託収賄罪などで逮捕された。

す。そして日本関係のことを教えている人が一番多いのです。それなのに研究センターがないというのはおかしいと思っていました。パークレーだとかハーバードだとかコロンビアには皆あります。一番数が多いのに何もセンターがないから作りましょうとなりました。

しかし、私としては総合的な日本の研究をしたいと言いました。生け花とか歌舞伎だとか、俳句だとか、サイデンステッカーさんの文学もいいけれど、そういうものだけではなく、先端の技術だとか、医学だとか、ビジネスだとか、当時、日本の経済がだんだん発達しつつあるけど、どういう風に発達しているのかということ进行研究することも良いのではないかと主張したわけです。経済学部や法学部、医学部を網羅し、全ての意味で日本を研究するというもの。そうでないと、単なる歌舞伎などをやっても、ああいうものを知っている若者などは微々たる数しかいません。それよりも、漫画でも少し勉強したらいいのではないかと思います。だから総合的に勉強しなければいけないと、私が音頭を取って始めました。そして副会長には地震学が専門で、修士号は東大で取って、ミズーリかどこかの博士号をとった人物がなりました。今までの歴史や文学を背景とする地域の研究とは違うわけです。

最初は「それで結構だ」と何も言わなかったのです。ところが100万ドルが来ました。そしてそのお金を何に使うかという話になったら、皆、目の色が変わりました。私は、100万ドルは大きな額かもしれないけど、科学者たちはたくさんのgrantを、医学の連中や化学の連中からお金をもらってきて研究のために使っていると言いました。そういう人たちも私たちのグループに入れたら、こんなお金以上にもっとたくさんお金が入ってきてもいいはずだから、そういう人たちも招待して全部入れましょうと言いました。そして、また運動を始めました。そうしたら反対を食いました。もうその100万ドルを使いたくてしょうがないのです。それで私はオサラバです。

結局、拒否されたのですよ、そういうことすべてです。そしてイスラムの勉強をしている人たちや哲学の人たちもいるし、ユダヤ教の人たちもいるので、暫くたってから今度は中東センターを作りたいと言いました。最初はイースト・ウエスト・センター⁴¹に接近しました。イースト・ウエスト・センターに接近して、イランは入っている、しかしアラブの国は全然入っていない、イスラエルも入っていない、これはおかしい。なぜ東西文化センターと言っているのにアジアの一部であるアラブ

⁴¹ East-West Center : 1960年に米議会によって設立された、アジア太平洋地域とアメリカの相互理解・関係強化を目的とする教育研究機関。

やイスラエルが入っていないのかと言いました。そうしたら、所長が丁寧に迎えてくれましたがだめでした。その後、一年ほどしてから再度行きました。もう一度お願いしたいのですが、どうでしょうと。当時、1970年代の終わりぐらいでしょうか、石油が必要な時代でしたから、アラブ諸国だけではなくイスラエルも入れれば、そういうところからたくさんお金もらえるだろうし、是非センターをと言いました。そうやって接近しました。そうすると所長が、本当のことを言うと実はイースト・ウエスト・センターに来るお金というのは年間 10 万ドルですと言いました。たいしたことないのです。それでもいつもなかなかもらえないで困っている、もし私たちがアラブ諸国でも招待して入れたら大変なことになると彼は言うのです。何故かを聞くと、実は国務省の役人がユダヤ系（シオニスト）なので私たちがそんなことを提案したら、絶対にその提案を受け入れてくれないからそんな無駄足をするなど言うのです。

中東研究所を作ろうとするとそういう問題が出てくるのです。そして私が元いた USC は、私が出てからサウジアラビアかどこからか大きなお金がもらえるようになりました。USC はお金持ちが来るところで、私の大学院生の一人に Barbara Shell という人がいて、このシェルはあの石油会社のシェル家の娘です。そういう人たちがたくさんいるのです。そういう人たちはもちろん歓迎します。けれども、結局、大きなお金をもらうことができませんでした。やはりシオニスト系の人たちが入っているのです。USC も、研究所を作るにしてもそういうハードルがあるわけです。私が会議でいろいろな問題を起こしたのと同じような問題です。見えない手によってそのようなことは全て否定されてしまう。それは日本ではあまり問題になりません。そういう点では日本はもっと自由なのです。もっと自由にやって欲しいわけですが、それは本当に残念なことです。少数の人があまりにもたくさんの人の生命と destiny というか、将来を決めてしまう。でもそれが現実です。

アメリカと中国

今、ひとつだけ可能性があると思うのですが、それは中国の対応です。アメリカの財務省の証券 Treasury Bills（米短期国債）というものですが、それを一番たくさん持っているのは中国です。日本はその何分の一です。昔、日本はそれを使うことができたのですが、今はそれを使ってもどうということはありません。

今、中国は輸入の問題を起していますが、今までは Treasury Bills は中国が買っていたのですが、最近買い渋っています。他のお金に変えているのです。ユーロだとかに。だからアメリカは心配していると思います。イスラエルはそれを感じていて、恐らく中国に接近すると思います。ところが、中国はシオニスト（ユダヤ）系の人口というものは微々たるものです。影響はあまりないのではないかと思います。

どうなりますか。パレスチナ問題も、恐らく最終的には中国を味方に入れない限り解決できなくなるでしょうね。だから、中国と日本の関係は重要なのです。

——：この前、中国の中東専門家の人と話をしましたが、なかなか正直に話してくれて面白かったです。アメリカにとっても気を使っていて、口出しはしないと。

黒田：いい顧客ですからね。今、オリンピックで本当に心配していますからね。でも、それが中国の一番大きな武器でしょうね。もちろん原爆だとかありますが、ああいうのはどこの国でも今は持っていますから。どこの国というか、北朝鮮さえ持っています。本当に中東を勉強する人たちにとって嫌なところ、嫌なところというか、特にアラブ側を勉強する人にとってはアメリカというのは嫌なところですよ。自由に行動できないということです。

盗聴、メディアの閉鎖性

——：ダニエル・パイプスのキャンパスウォッチ⁴²とか、ああいうキャンペーンとかはどうですか。

黒田：そうですね、あれはどこまで目を光らせているかわかりませんが、それよりも恐ろしいのは、ある記事を見つけたのですが、その記事によると、私たちは電話を使うと料金を取られます。つまり、何分、誰と話をしたかある人は知っているわけです。それを録音している可能性も充分あるということです。電話会社というのはいくつかあるのですが、今だんだんと統合されています。でも、請求書を出すのは一箇所です。全ての連絡をとるセンターらしいのです。そのセンターの運営会社がイスラエルの会社らしいです。そこに入ってこない請求書というのはホワイトハウスのものだけだそうです。全てのアメリカ人の通話は盗聴されている可能性が充分あるのです。日本もその可能性が充分あるのです。

——：そうですね。

黒田：だからその方がもっと恐ろしいです。それが本当だという可能性がどのくらいあるかはわかりませんが、可能性としては充分あると思います。イスラエルはそういう情報テクノロジーは素晴らしいですから。

——：そういう意味ではそれこそ、お尻の穴の隅々まで知られてしまっているという気がしますね。だからといってそこから何が出るのかという、そういう手詰まり感もこちら側ではかなり強くはないのでしょうか。

黒田：どちらにしても、我々にあまりできることはないのですよ。それで、結局、ある程

⁴² Campus Watch : Middle East Forum が行っているプロジェクト、アメリカの大学で行われている中東研究の評価・批判を通して改善を目指す活動。

度の自由というのは、影響力がないうちは許すわけです。例えばイラン・パペ⁴³なんかも大変だったらしいですけど。私も彼のために手紙を書きましたが、クビになりそうになったのですよね。恐らく、彼は政府の高官や重要なポストにはつきませんが、単なる学者としている分には構わないのでしょうか。また、あれくらいの人がいないと、「俺たちは自由の国だ」とかを言うことができないので、彼は許されていたのではないのでしょうか。

——：結局、イギリスに行ってしまいましたからね。

黒田：彼は今イギリスですか。

——：ええ、当面とっていました。

黒田：それから、イスラエルの人間はどういうわけか事故死が多いのです。死刑は廃止されていますが、事故は誰にでも起こります。

——：しかし、第二次世界大戦のときにホロコースト被害を目の当たりにしたのは、現在アメリカにいるユダヤ人コミュニティーですよ。彼らはホロコーストの被害者ですよ。しかし今は、イスラエルから追われる人々も出現している。他方、第二次大戦時に追われ、アメリカに逃れた人々は、今やアメリカの先端技術や軍事技術の開発に関与して、第二次世界大戦後のアメリカの繁栄を支え、イスラエルをも支えている。

黒田：兵器産業とも非常に密接な関係を持っていたのです。だから、戦争の必要性がある程度あるわけです。

——：アメリカにやらせておいたら独り占めで、あんなに持っていてどうするのかというような富ですよ。

黒田：かつて日本が言ったことと同じですよ。日本だって自衛のための戦争で、石油とクズ鉄を止められて、結局、直接的に真珠湾攻撃に出たわけです。戦争をする理由というのはあまり変わっていないのです。

——：だから、この息苦しい日本から見ると、そういうアメリカでもチョムスキーが出てくるとか、「シッコ」を作る監督がためらいもなくああいう映画を作ってしまうとか。そういう自由はあり、日本から見るとうらやましいところですが。

黒田：でも、チョムスキーはメジャーなメディアは取り上げてくれません。朝日とか毎日とかにあたるABCやNBCなどでは全然取り上げてくれません。

——：ユダヤ系コミュニティーなどは、彼を歯牙にもかけないという感じなのですか。

黒田：そうです。時々、ニューヨークタイムスなんかは記事を書かせますが、テレビの座談会に出させてくれるということはまずないです。

⁴³ Ilan Pappé (b.1954) : イスラエル政府に批判的なイスラエルの歴史学者。2007年から英国エクセター大学教授。

——— : その場面だけを見ていると面白いな、と可能性が見えてくるのですが、ユダヤ人の学者の強力な試みを。サイドなども頑張っているあの図式も面白いです。また学生が教授に向かって強力にブーイングをしたりするわけですよ。それにも耐えなければいけない。

黒田 : そうです。

——— : アメリカのユダヤ人社会は変わっていくという感じはありませんか。

黒田 : 混血は相当進んでいます。混ざっている人たちはたくさんいます。例えば私の論文のアドバイザー、何と言うのでしたっけ、日本語でなんとか教授という。

——— : 指導教授。

黒田 : 指導教授の結婚相手はキリスト教徒です。それも日本生まれで日本の宣教師の娘です。だから、そのようにいろいろ混血の人が多くなってきています。しかし、政治的圧力は様々な局面に現れます。

指導した真面目なアメリカ人学生と彼が被った間接的圧力

私が指導した、ある学生の話です。この学生は、私の下で世論調査などの仕事で博士号を終えて、最初はマーケティング・リサーチの会社で働いて、それから自分のマーケティング・リサーチの会社を始めました。それで、彼の専門ではないのですが、私は、時々、中東の話もしていました。そして、少しずつ私の話を聞いて興味を持ち始め、怒りはじめたのです。あまりに国益を重んじないアメリカ政府のえこひいきにです。それで非常に立腹して、そんなことまでするなと言ったのに、政府の高官のところへひどい手紙を、個人的にも中傷的になるようなひどい手紙を書いたのです。書いたということまでは聞いていました。それから暫くして彼に連絡をしようと思ったら、どうも態度が違うのです。私に近づきたくないのです。どうかしたのかなと思ったのですが、あまり追求はしませんでした。彼は誰かにはっぴかけられたのかな、と思いました。

彼はあちこちの会社のために市場調査をしていたので、そういう関係の人を通じて「仕事がなくなるぞ」とかなんとか言われたのかはわかりませんが、態度ががらりと変わりました。何とも言わなくなりました。こちらからはあまり連絡しないようにしていますが、恐らく誰かが圧力をかけたのではないかと思っています。彼は典型的なアメリカ人で非常に真面目な学生でした。私は彼の両親とも会っているのです。彼は助手をしながら、いろいろな仕事をし、論文は学士号から始めて3年かからずに終えています。ほとんど徹夜です。そして一度 nervous breakdown うつ病みたいになってしまって、「家に帰る」と言ったのです。なぜ帰るのかと聞いたら、「何もする気がしない」ということでした。そして私が空港まで送っているいろいろな話をしながら行って、飛行機を待っている間にもいろいろな話をしました。だから、

さよならと言って飛行機に乗る頃には、もしかしたら帰ってくるかもしれないと言って帰りました。そうしたら、2、3週間して帰ってきました。それで論文を終えることができました。彼は両親のところに帰っていったのですが、両親が私に非常に感謝してくれて、卒業式のときに二人が私のところに来て「ありがとう」と言っていました。彼はものすごく真面目な人で熱心に何でもやる人で正直な人です。真の意味での愛国者というか、国を愛する正直な市民です。そういう彼が初めてそういうことを知ったので、本当に怒ったのです。アメリカの市民としてなぜ我々の国益が反映されないような政策を我々の政治家は取り続けるのかと。

それで、恐らく彼が音信不通のような状態になってしまったのではと思っています。それ以外には理由はないのです。彼とは私がテキサスに行った時にも会いました。一緒に2日ぐらい行動していろいろ話をしたりしました。妻にアラビア語のCDだと言ってCDをくれたりもしました。その頃から中東に興味を持ち始めていて、どんどん自分で調べていったのです。いろいろなことが書かれていますから。今はネットとかもあるのもっとたくさん書かれています。その頃は雑誌や新聞、本といっても取り寄せないとなかなか見つからない時代で。それでも取り寄せて読んだのでしょね。カンカンに怒ってしまって。悪いことをしたなあと思ってしまって。悪いことではないのですけどね。仕事の上で非常に迷惑をかけたのかなと思ったのですが。そういうこともあります。

直接的圧力

——— : そういう間接的にいろいろとプレッシャーをかけるというようなお話があるようですが、黒田さんの論理に向けてプレッシャーをかけてくるというような経験をされたことはありますか。

黒田 : ああ、ありますよ。新聞も私が言うようなことはなかなか取り上げてくれません。ところが、私はたまたま、クラブ・フィフティーンという外交などを語り合う会にホノルルで参加していました。なぜクラブ・フィフティーンなのかというと、これは毎月15日に行うからです。そこでいろいろな有名人などを交えて、一ヶ月に一回会合します。ハワイというところは、通りがかりの場所にあるので、いろいろな有名人が行ったり来たりするのです。そういう人たちをストップさせていろいろな話を聞いたりするのです。たまたまある日系人がそのお膳立てをして、それで私は彼とはよく知り合いになりました。

ホノルルには新聞が二つあって、その一つの新聞の編集者がクラブ・フィフティーンにいたので、その彼と私が知り合いになって、その彼を通じて私の論文のようなものを大きく取り上げてくれたのです。私はいろいろな問題を起こしたことがあるのですが、知っていてよかったという、いい影響があったこともあります。勿論、

シオニストからは酷評され、散々たたかれました。

これはちょっと中東とは離れているのですが、1973年以降、ドルと円が変動相場制に変わって、日本の企業がだんだん海外進出できるようになったときにいろいろと問題が出たのです。ハワイへの進出ですよ。その前からいろいろな調査に関係していたので、日本企業の進出に関してハワイの人たちがどのような態度を示すのか調査してくれと、日本のジェトロから依頼されました。その時の結果も新聞の一面に大きく報道され、名前が出たのです。その時も、私はエディターを知っていたから出してくれたのです。

ちょっと横道にそれますが、世論調査というのは非常に政治的です。結果はある程度そのデザイナーの思い通りになるわけです。「ハワイの人たちのリアクションがどのようなものか」というのが依頼だったのですが、私の思っていた日本の政策というのは、今、お金が余ってきたからハワイへの進出はどうかというものでした。ですから、恐らく政府の政策としては進出してあげたいと思ったのでしょね。だからそれを聞くときに、どのようなことをしたらいい結果が出るかを考えて、非常に客観的に質問するのです。

しかし、問題の順序が重要です。最初に、外国資本の導入をあなたは歓迎しますか、それとも歓迎しませんか、と聞いたのです。外国資本といえば、オーストラリア、ヨーロッパ、日本といろいろあります。実際にあちこちから来ています。「歓迎しますか、しませんか」 “Welcome or not welcome?” そして二番目には “Do you welcome or not welcome Japanese investment?” (あなたは日本の投資を歓迎しますか、しませんか) と聞いたのです。そうすると、アメリカ人は、どこの国の人でもそうですが、一貫性を保とうとします。ですから一度「はい」と言ったら、その次の質問にも「はい」というべきであると思ってしまうのです。だから「はい」と言わせたい質問があれば、「はい」と回答する質問の次にその質問をすれば、「さっき、外国投資の導入に賛成したから、日本の投資の導入に反対したら俺は偏見を持っていると思われてしまう」と思って、結局「歓迎します」と言いやすくなるのです。それでそうしたのですが、結局、結果は思い通りになりました。大体、大多数が賛成で、不賛成は少数の30%か35%ぐらいでした。6割ぐらいが賛成でした。それがでかでかとうたったのです。そして結局、若い人とかハワイ系の人たちは反対で、日系や白人系は賛成でした。そういう記事が出たのも、エディターを知っていたからでした。

個人的なつながり、個人的な体験

黒田 : ですから知らないとだめなのです。アラブ系にしてもユダヤ系にしても、個人的なつながりは重要です。どこでもそうですけどね、ロシアでもどこでもそうです。

—— : 70年代のハワイ大学の黒田教授のコメントは、ハワイ大学に黒田あり、と。

黒田 : いろいろ非難されました。言わないけれども心はわかっているよ、というような感じですよ。ですから嫌なものです。いつどこに誰がいるかわからない。誰が私に反対しているかわからないし。

—— : アメリカの学生たちの、特に研究に携わっていく若い世代の中東への関心というのはどういう形でできあがっていくのでしょうか。

黒田 : 大抵の人はわかってくれます。ただどアメリカ人の学生が知らないのです。だから中東のクラスを1年に1回は必ず教えていたのですが、戦争があるたびに学生の数が増えていきました。ある時、湾岸戦争が終わったばかりのとき中東の政治を教えていて、湾岸戦争の veteran (退役軍人) が一人いました。始まったのが 91 年の 1 月でしたか。その人は「私はバグダッドの付近に 10 月ごろからいた」と言うのです。でも戦争が始まる直前の 10 月に何をしていたのですかと聞いたら、「いや、バグダッドの近辺にいました」というのでどうやって入ったのかと聞いたら、「パラシュートです、夜中に」と言うのです。そして情報収集をしていたのです。それで戦争が始まるまでずっといたのです。

ですから、今、イランとかシリアにそういう軍隊が入っていると思います。山の奥にいたらわからないようです。「どうやって過ごしていたのか」とか「何をやっていたのか」と聞かれても言えないと言っていました。そういうものですよ。

—— : そうすると、この戦争へコミットする中で、やっぱり兵隊で出て行ったり、その家族とか、そういう意味では中東への関心の深化というのはものすごく進んでいるということですね。

黒田 : 日本でも同じようなことはあるのではないですか。

—— : まあ、自衛隊とか。アメリカの高校までの教科書で中東というのはどういう教科書で出てくるのですか。世界史という科目はあるのですか。

黒田 : ありますよ。中東も出てきます。わずかですが。たいしたことは載っていない。そして一度それに関した問題が浮上したときに私は、イスラエル人がセキュリティーを求めるならば、パレスチナ人にもセキュリティーがある状況にならなければイスラエルの安全保障もないということを書きました。だから、イスラエルの平和と安全を望むならまず、キリスト教徒とイスラム教徒の平和と安全の状態を作り上げなければいけない、それには、占領地から撤退しなければいけないと言いました。いろいろな反対が出ました。ユダヤ系を含むシオニストの人たち、それからシオニストのアメリカの新聞にある Letters to Editor (編集者への手紙) という投書の中に。

それでも、一人だけ私に賛成してくれたユダヤ系の弁護士がいました。その人が私のことを弁護してくれて、プロフェッサー黒田のような人をハワイ大学で持っているということは我々の誇りです、なぜなら本当に彼の言うように、他の人たちや他民族の安全の保障が存在しない限り、我々ユダヤ系の人々の安全保障や、我々イスラエルの存在と平和はありえないということを書いてくれました。嬉しかったです。

思想の自由はあるのか？ ないのか？

黒田 : ハワイは戦後、共産党が非常に強かったのです。

—— : そうなのですか。

黒田 : ええ。第二次大戦後、波止場で働く人たちが、非常に communist (共産主義者) といつか。そしてマッカーシーでだいぶやられたのですが、それで刑務所に連れて行かれた連中を弁護したのがその弁護士だったのです。だから、そういう弁護士もいます。また、最近、日系のハワイ出身のアーレン・K.ワタダ陸軍中尉が、イラクへ行くことを拒否しました。ワタダ中尉を擁護したのが、エリック・サイツといったかな、ユダヤ系の弁護士です。アーレンのことは個人的に知っていました。彼は三世か四世で、彼のお父さんも知っています。ベトナム戦争の veteran (退役軍人) でやはり戦争反対者で、その息子です。その息子がイラク戦争反対の軍人です。ちょうど次の世代です。ですから日系人の中にもそういう人がいる。そしてユダヤ系の中にはそういう人を弁護する人たちもいるということです。

そうかと思うとアメリカの赤ちゃんの本で、昔から有名な、なんとかという人が非常に有名な本を書いて、ベトナム戦争にも大反対でした。ところが 73 年に戦争が勃発したら、彼は戦争に大賛成でした。スポックという人かな。ドクター・スポック⁴⁴。赤ちゃんの本によく出てくる。彼はベトナム戦争に大反対で、中東の戦争が 73 年に始まったら大賛成です。だからそういう風になってしまう、豹変する反戦論者もいる。でもそうでないユダヤ系の人もあります。ですから千差万別です。

でも一つだけ言えるのは、ユダヤ系の中には優秀な頭脳の持ち主がたくさんいるということです。それは否定できないです。そしてそれは必ずしも先天的なものばかりでないと思います。やはりジュエイッシュ・マザーといつか教育ママのお陰かもしれない。そういうバラエティといつか、いろいろな人が集まった国がアメリカということです。そして自由は狭い意味での自由はあるのですが、広い意味での自由といつかは存在しえないのです。

⁴⁴ Benjamin Spock (1903-1998) : アメリカの小児科医、日本でも「スポック博士の育児書 (1966 年)」で有名。

anti-Semitism (反ユダヤ主義) 研究をするという、研究資金などもたくさん出るので、誰が一番嫌われているかと聞いたときに Damn Christians と答えたあの anti-Christian (反キリスト教徒) の気質と同じようなものですよ。リバーシしたものです。ところがそういうものを研究しようと言って研究資金を政府に申請しても全然出してくれないのですよ。白人の優越心を研究したいと言ったら資金は出ますが、黒人の anti-white というか、白人反対主義者の研究をしたいからお金をくれと言っても誰もくれません。ですから、そういう面の学問の自由というのはありえません。でも研究はそうあるべきではないです。日本ではどうなっているか知りませんし、政治的にどうなっているか知りません。異なった意味での差別というのはありえるでしょう。

——— : 黒田先生がおつくりになった日本研究センターというのは当時、地域研究、エリア・スタディ、とそのような言葉のコンセプトで研究所を作ろうと思ったのですか。

黒田 : 私の考えとしては総合的な研究所にしたかったのです。

——— : 歌舞伎研究ではなく。

黒田 : そうです。科学技術などを生み出した、ものづくりの研究だとかそういうものを含めての日本の研究です。アメリカの学会ではあまりなされていないのです。

——— : 先程おっしゃったような地域研究にしる、お金の出し方とか、政治的な方向づけとかオリエンテーションとかあるわけですね。それは地域研究についても同じですか。

黒田 : 同じだと思います。だから、方法論というかサブジェクトが一つ、そして方法も一つです。日本研究の場合、皆、最初は私をグループの議長として受け入れてくれました。その頃、お金がなければたいしたことがないから賛成してくれたのでしょう。ないよりましだからと賛成してくれたのでしょう。しかし、いざお金が来て、お金を分ける段階になると、私は拒否されました。だから、歴史や文学をやってくれと言ったのは、彼らが考えたことでした。アソシエイト・メンバーとメンバーの二つに分けると言うのです。言語をしゃべらない人たちはアソシエイト・メンバーにしるというのです。医者とかビジネスとか弁護士の人。

言語をしゃべればそれに越したことがないのですが、そうすればおのずから制限されることになります。だから、そういうことをするということは結局、second class citizen (二等市民) というか、そういうものを作ることになってしまいます。これは差別です。ですから、研究資金はもらえない、しかしメンバーにはなれる、でもそれはアソシエイト・メンバー。そんな非民主的な独裁的なことをする研究団体と私は関係したくないと、私は退きました。

——— : でも歌舞伎とかそういうものは日本側がそういう政策を取っているということもありますよね。日本語が出来なくても、日本のことは英語で充分勉強できると思

うし、そういう日本研究を支援すればいいのではないかと思います。

黒田 : 可能だと思います。

—— : むしろ、その頃はそういうのをやる必要がないと上が判断していたのでしょうね。

第5章 実際に知り、体験し、

複眼的な思考を心がけることの重要性

技術革新の流れの中で：パンチカード、カードソーター、パソコン

黒田：ですから、中東の勉強もすべて、大学院では終らないのです。新しいものをどんどん習っていかないとだめなのです。例えばパソコンでも何でも、私が大学院の学生の頃、初めてカードソーターというものが出ました。このくらいの大きさのパンチカードで、ご存知ですか。穴を開けるやつ。あれがちょうど出始めた頃で、論文を始めた時はまだありませんでした。少し経ったら出てきましたが、社会科学学部では持っている人は誰もいないのです。学生を登録するところ、そこだけにあって、そこで夜使わせてもらって始めました。それから暫くたってから社会学部で初めてカードソーターを買ってくれてそれを使いました。そうやって始まったのが私の論文だったのです。そのときは東大の社会学部のホンマさんという人だったかな。大学院の学生でしたが、その方ともう一人の助手を通じて東京大学、早稲田、慶応、京都大学などの法学部の学生たちと司法研修所の研修生にお願いして、アンケート式でしたが、学生の中で、どういう学生が将来政治に興味を持つか、どのような政治に興味を持っているか、その中の誰が政治家になりたいのか、誰が興味を持たないか。政経学部の人たちもちろん持っているのですが、なぜ法学部かという、アメリカ連邦議会では大体6割が法律出の議員です。もう一人私の学生の友達がトルコの同じような調査をしていました。そしてもう一人のアメリカの学生はアメリカの法学部の調査を行っていました。

その頃ちょうど、カードソーターが出てきたのです。それが出てきて、だけどあまり使うことができなかつたのです。それがモンタナにはもっと立派なパソコンみたいなコンピュータが来て、この部屋ぐらいの大きさのコンピュータで、夜、ある一定時間だけ使うことができました。それは理工学部や何かが使っているコンピュータで限られた時間だけ使うことができました。USCとUCLAとそれからハワイ大学では、大きいコンピュータになり、自分では実際にコンピュータに触れなくなりました。これこれこういう仕事をして欲しいというのを書いて、それを提出して翌日に戻ってくるのです。だからコンピュータ自体を見ることはなかつたです。そういう状態がずっと長く続きました。そしてパソコンが出始めたのが1980年代です。その頃からパソコンを使い始めました。パソコンが出てきてエリア・スタディも何

も非常に進化したのです。そのおかげというのは、結局、こういう機械の発達です。それが大きく貢献したと思います。日本では英文タイプライターができる人はすぐパソコンに移行させることができました。私はタイプライターができたので、すぐにパソコンに馴染むことができました。しかし日本の方はそうはいかないのです。さっきの「Japanese Culture in Comparative Perspective」日本の文化に関する本の共著者もその1人でした。数量化理論で有名になった元統計数理研究所所長林知己夫さんも自分ではパソコンは苦手でした。

——：若い人はもう使いこなしていますね。

黒田：結局、エリア・スタディでも何でもそういうことをすぐにできるような言語を持っていると、例えば英語でもアラビア語でもそうでしょうが、日本語だとそういう変換ができなかったのでしょうか。スピードとかそういう点において、ついていけないのでしょうか。日本語の持つ欠点というか、欠点ではなくいいところもたくさんあるのでしょうか、どちらかという機械文明についていけない「遅れ」というものがどうしても出てくるのでしょうか。若い人は問題ないのですが。私も最近の携帯電話の発展にはついてゆけず苦労しています。

アラビア語で議論をすると

黒田：ところで、私たちはアラビア語と日本語と英語の三ヶ国語の研究をしたことがあるのですが、ご存知ですか、私たちがやった調査。

——：ええ、読ませていただきました。

黒田：結局、我々は日本語でしゃべっているときが一番あいまいなのです。そしてアラビア語が一番はっきりしているのです。極端なのです。agree / disagree といふかあれが一番激しいです。それをヘブライ大学で行ったらどうなるかシローニー先生に聞いたのです。こういう調査をヨルダン大学、AUC (American University in Cairo)、ハワイ大学、筑波大学で行い、こういう結果が出ているのですが、ヘブライ語でやったらどういうことになりますかと。「アラビア語と全く同じだ」と言っていました。それからリングイストの書いた本を読んだのですが、やはりヘブライ語は極端な表現が多いそうです。何かを言う場合、すぐに極端な態度をとりがちというのが出ていました。だからそれは本当だと思います。

結局、セム語文化は全体的にそういう傾向なのでしょうね。ですから、一信教を出した民族だということも理解できます。それに対して、よろずの神の森首相じゃないけれど、日本はあいまいだという結論になります。だから、そういう面での日本文化を勉強するには、ある程度日本語を知る必要があるけども、普通の、専門的なことでも今はほとんど英語で読むことができます。

——：専門的な研究者は日本語をやっていないといけません、もっと一般の人に日本の

基本的なことを教えるには英語で伝えられるのではと。

黒田 : そうそう。

黒田家の家紋、名前の持つ重み

—— : [居間の壁に家紋らしきものが額に入れられて飾られているのを見て。] あちらの紋は黒田家の家紋ですか。

黒田 : ええ、黒田家の代々の紋です。日本に帰って来てから発見しました。私の父系はてっきり、農業の百姓だと思っていました。というのも私のおじいさんというのが栃木の人ですが、最初、多田という田舎から出てきて仕事がないので運送屋を始めました。それで、父が日通で働いていたのかもしれませんが、とにかくお金がなくて持っているものといえば、筋肉だけでした。お金がなくて始められることといえば担ぎ屋というか、駅から何かを担いで届ける宅配のようなものです。それで始めて、中には払わない人がいる。物を持っていてもお金を払わない。そうすると、居間のところに柱がよく出ていますが、力があつたのであれを…、それでお金を競り上げたとか言っていました。

それでなぜ多田から出てきたかと。我々のはてっきり百姓の次男坊だと思っていました。それが、今度、日本に帰ってきてはじめて発見したのですが、彼は明治時代に日露戦争に参戦した近衛兵の一員だったのです。近衛兵というのは士族でないと入れない軍隊なのです。そして聞いたら、祖父は苗字帯刀を許された黒田家の長男だということです。だから、なぜそんな一文無しになったのかと聞いたら、彼は結婚してはいけない相手と駆け落ちをしたので、栃木市に出てきたということでした。それで何もなくてそういうことを始めたというのが黒田家の始まりだということです。そうだとすると、もともとは苗字帯刀を許された士族の一員らしかったのです。

そういう理由か、私は会社に勤める仕事は嫌だったのですが、私の息子がたまたまパイロットになって、今は機長ですが、ちょっと関連した会社〔注：運輸ということ〕、航空会社で働いています。息子に2年前、娘が生まれて、彼らは今、テキサスに住んでいます。ダラスのアメリカン航空のハブ、中枢で働いています。それで娘が生まれたので届けを出しに彼が市役所に行ったら、この子の nationality (民族籍) は何かと聞かれました。あそこではまだ人種を区別しなければいけません。だから、“mixed” (混血) と言ったら、mixed じゃだめだと言われたのです。「お前が父親か」と聞かれたので、そうですと答えると「お前は何か」と聞かれ、「私も mixed です」と答えたのです。彼はパレスチナ人と日本人の混じりですから。そこに写真がありますが、顔はわからないのですよ。顔からするとわからない。そうすると、「クロダという名前はこの名前か」と聞かれたので Japanese と答えたら、

「だったら、お前の娘は日本人だ」と言われました。彼女は全然日本人の容姿ではなく、ちょっと金髪がかかっていて、髪の色は明るく、顔の形も全然日本的ではないのです。でも出生証明書には Japanese となっています。唯一「黒田」という名前が残っているのはその子です。後は全部、私の父の兄弟は女の子ばかりで、男の子はいないのです。私が唯一、黒田なので、私が黒田家の末裔というか、大変なことになっています。

そういう由来のものです。大変、話が長くなりましたが。家紋というのですか、これは。昔はこれを重要視したようですが、最近は重要視しないようです。ヨーロッパでも家紋はあります。私の娘の夫がスコットランドの出身で、スコットランドの家のマックレランドというのですが、マックレランドのそういうのが家に飾ってありましたね。これは色のついた木製の物ですが、娘に欲しいかと聞いたら欲しいというので、これと同じものを注文して娘のために一つ作りました。そういうことです。

——：わかりました。ありがとうございます。

黒田：中東から随分離れてしまいました。

——：近々、黒田さんにパーソナルヒストリーを書いていただきたいです。

実際に知ることの重み

黒田：大学の1年生で渡米なんて、とてつもないことですね。私は一人っ子なのでよく母が許してくれたと思います。心配だったと思います。私が卒業した時(1956年)、母に電話をしたのですが、その頃の電話というのは予約するのです。何月何日の何時ごろに電話するからと前もって予約するのです。そして直接は繋がらず、両側を交換手が呼んで、そして繋げるのです。大変でした。

——：60年代の始め頃でもそうでしたね。

黒田：そういう時代から、今はイーメールが無料で、本当にただみたいなものでしょうかね。まあ、それを受信している会社があるそうですが、それが、たまたまどこかの国と関係しているらしいのですが。それがどこの国かはわかりませんが、そういう時代になってしまいました。中東の勉強も誰にとってもずっと楽になりました。学校を終えてから習うことのほうがはるかに重要になりつつあるのでしょうか。全てがプロセスじゃないですか。過程というかネバーエンディングのプロセスというか。

地球温暖化と、暗黒化⁴⁵も進んでいます。中東とある程度関係があるのですが、暗

⁴⁵ global dimming: 近年では「地球薄暮化」と翻訳されている。大気汚染などの影響により、太陽光線の地表面への到達量が減少している現象。

黒化というのはご存知ですか。暗黒化が起きているというのがわかったのは、1960年代にヨーロッパから来たイスラエルの学者とロシアの学者、日本の学者も発表しましたが、太陽の光線が地球に届かなくなってきたという報告書があります。イスラエルの学者が発見したのは、砂漠の畑には少しずつ水をやる方法がよいという方法です。あの方法で水をやって水が乾く度を調査していた学者がいます。その学者が発見したのは10年から15年の間に水の蒸発が毎年少しずつ、少なくなってきたというのです。水は少なくてすむようになってきているというのです。でも、誰もそれを深刻に受け入れてくれる人はいなかったのです。温暖化ということは相当昔からわかっていたのです。ただ、これは温暖化と正反対の事です。だから、なぜそういうことになったかわからなかったのです。

ところが9.11事件の時に、9月11日から3日間、民間の航空機が飛ばなかったのです。たまたま息子が家に来ていたので3日間帰れなくなりました。その間、アメリカの上空を飛ばなかったらアメリカの平均温度が3日間に1度下がったのです。それで世界中の学者が「ああ、これは確かに彼らの言っていたことが正しい」ということになりました。ですから、温暖化と暗黒化というか、「たそがれ化」が、同時に並行して起きているのです。それで温暖化が少しは遅れているということも皆が信じるようになりました。ところが日本のメディアもアメリカのメディアもこれをあまり広告しません。言ってくれないのは、ではどうすればいいのか。結局、自給自足の世界にするというか、経済的にもっと質素な生活をしなければいけないということです。そうでなければ、今、私たちは自動車のアクセルとブレーキを同時に踏んでいるような状態なのです。自動車の命は短くなる一方です。だからプロセスですが、このままの調子で贅沢をしているとネバーエンディングではなくなるかもしれません。アラブ・イスラエル紛争、砂漠に作られた農園、石油、9.11事件、温暖化・たそがれ化と全て中東に関係があるようですね。

実際に知るということ：労働者とはなにか、ソ連体験

———：今は、インターネットでさまざまな情報を得られるようにはなりましたが、弊害もあるように思えます。

黒田：そうです、インターネットの時代ではあるものの、対面した意見の交換というのは本当に重要です。それがなくなりつつあるということは本当に悲しいことです。そうすることによって外国の学者を知ることもできますし、実際、その人たちの学者としてではなく人間としての姿を見ることもできます。私は一度ソ連邦に招待されて行って驚いたことが二つあります。一つは本当に驚いたのですが、その会合はナホトカで行われました。一番驚いたのは、ロシア人は飲むのが好きで乾杯をしますが、いろいろな乾杯があって、オーストラリアの労働組合代表が“ To the

workers of the Soviet Union!”（ソビエト連邦の労働者に乾杯）と、乾杯をしたのです。そうしたら、私の隣にいたロシア人の学者が“scholars, too?”「学者も入っているのかい」、と小声で言うのです。学者は労働者だと思っていないのです。働く人だと思っていないのです。よっぽど何か言おうと思ったのですが、ちょっとにやにやしていただけでした。

私はアメリカの大学教授の組合に長い間属していました。長らく全米最大の労働組合であったAFL・CIOの一部であるAFT, American Federation of Teachersというところに属していました。皆、労働者と同じ組合です。ただ、教員の部であったのです。だからそういうものの中で、アメリカは非常に資本主義の社会ですが、ある意味においては、働く人は誇りを持って働いているわけです。それがこの共産主義国の学者たるや、学者は働くものの中に含まれているのかと、聞くような感覚ですよね。それで後でその人に「おたくの息子と娘さんは何をやっていらっしゃるんですか」と聞いてみたのです。そうしたら「ようやく苦労してホワイトカラーの仕事を得ることができた。よかった」と息子のことを言いました。その言い方が、本当によかったと言っているのです。いかにもいい仕事に就いたというのです。結局、肉体労働している人たちを蔑んでいるというか差別しているのです。それがこの共産主義の国かと思って「これは本当なのか？ はあ…」と行ってしまいました。ですからこういう国もあるのだな、と行って。

もう一つの驚きはホテルの部屋にはラジオが付いていて、テレビも各階に一台ありました。これは1978年のことです。ラジオがあったのでラジオを付けたのです。そうしたら、ラジオのつまみが一つしか付いていないのです。普通いくつも付いていますよね。これは変だなあと思ったら、大きくするか、小さくするかしか選択がないのですよ。ラジオ局は一つしかないのです。ああ、大変な国に来たと思いました。でも、招待してくれた国に対してそんなことを言ったら悪いので何も言わずに帰ってきました。

視点を変える、定年とは

違った目から見ると矛盾がたくさんあるなと思いました。日本も敬老の日なんていう国民の休日がありますよね。ところが大学の教授たちも60何歳かになると自動的に肩たたきをされて皆、出ていかなければならなくなります。差別ですよね。アメリカはそれがなくなってきているのはいいことです。でもやっぱりそれも戦って戦ってようやく勝ち得た権利です。ユダヤ系の同僚でナチスの迫害を逃れてアメリカに来てハワイ大で教えていた国際法専門のワナー・リービーというのがいました。自分の意見をしっかり持っていて、人になんと言われても動じない私の尊敬するインテリでした。彼はすでに亡くなっていますが、彼は65歳で辞めろと言われ

ました。これはもう 30 年位前の話です。とにかく辞めろと言われて、辞めざるをえなくなったのですが、彼はそれを「不法だ」と言ったのです。65 歳ですからまだ若くてぴんぴんしています。彼は法律が専門ですから告訴をしたのです。そうしたら 5 年かかって、彼の言い分がようやく認められて、70 歳までは教えてもいいということになったのです。でもその時点で彼は 70 歳ですよ。それでもう一度告訴しようとしたのですが、また 5 年かかってしまうので大変だということで彼はギブアップしました。そうしたら、案の定 2、3 年したら年齢制限が撤廃されました。だから自然にそうなったわけではなく、それぞれ戦ってようやく勝ち得た権利です。日本ではそういう可能性はありませんか。

———：私は来年の春でもう退職です。

黒田：どうなんですか。だめですか。

———：教師が定年延長を要求して実現する可能性は皆無ですね。

黒田：退職しなければいけないというわけですか。

———：独立行政法人化後の国立大学では教員定年延長の動きが見られますが、それは国が年金受給開始年齢を遅らせたのに応じてのことであって、年金受給年齢前に退職して支障が出るのは困るので定年を延長するという、ネガティブな措置に過ぎません。

黒田：そういう点では、アメリカは労働者を優遇しています。フライトアテンダントですか、日本でスチュワーデスといいますか、ああいう人たちも今、アメリカの飛行機に乗ると歳を取った方が多いですよ。もう 60 いくつになったちょっとよぼよぼのおばあさんが一生懸命コーヒーを持ってきてくれたりするんですよ。日本は若い人しかいませんけどね。

———：でも、この時代、退職を迎えると後任を取らないでそのポストを凍結し、そして予算の足りない分をそこから捻出する方向に向かっていきます。だから実際、レギュラーの先生の仕事のノルマがものすごく増える。しかもお金の関係で非常勤も雇わないのです。

黒田：ああ、そうですね。では来年はどうするおつもりですか。

———：もう教えないで、少し自由にやってみたいですね。

———：今、私はアラビア語学科なのですが、3 講座制で 3 人のレギュラーの教師がいて歴史とか政治学とかを教えています。これは実は凍結が決まっていまして、取らないということになりました。ところが今、言語学講座の同僚が突如重病になってしまったのです。だから彼の授業もどうも秋から出来なくなるという緊急事態になったものですから、急遽、その先生のポストは取る方向への動きがあるらしいのですが、基本的には全然改善の方向ではありません。

黒田：そうですね。

———：昔は、地方から東京外語大学に移ってきた先生方は喜んでいましたが、今、外語大

学に来ると先行きの見通しも暗いし、給料もどんどんカットの方向になってきているし、仕事は増えます。しかも、雑務がものすごく増えてしまいました。だからいままでは大学の教師というのは半分事務員のようなのです。

アメリカの大学院：学生と教師の関係

黒田：アメリカでの大学教授の一つの特徴というか、私が大学院の学生になってわかったことがあります。大学院の学生になると助手をやったりします。また、多くの場合、教授が学生を自分の家に呼んでくれるのです。そして夕食を振舞ってくれたりして、個人的に知り合ってファースト・ネームで呼び合うような関係を作るといいことだったと思います。ですから社会的にはある程度同等の地位で話し合うということが出来るような状態を彼らが作るのです。そうすると結局、学びやすいというか、お互いに話をしやすくなるという可能性があるのです。私はそれを非常にいいことだったと思います。そうすることによって、個人的に先生を知ることが出来たし、家族を知ることが出来ました。単に大学で講義をしている教授の姿だけでなく、家庭でのその人の生き様というか人間模様というものが垣間見えて、非常に勉強になりました。それはいいことだったと思います。どこの大学にいてもそういう風習がありました。通常の学部教育の場合だとそれは無理です。学生がたくさんいますから。でも大学院になると数が限られてくるので、私がマスターを、修士号を取った時も、アメリカの教授に呼ばれていろいろ個人的に知り合うことができて、本当によかったと思います。そういう点、日本はどうですか。日本はゼミがあつてとかで個人的に。

———：ええ、大学院だとそういう関係が。

黒田：そういう関係が作れるということですね。だからそういうところは本当にアメリカのいいところだと思います。何かを言いやすくしてくれるとか。それから質問能力を養うことが出来るとか、単に講義を聴いているだけではなく、質問をする、ソクラテスの会話のような教育の現場を作ってくれるということは非常にいいことだと思います。それが日本の大学のゼミと言われるものですか。

———：最近、アカデミック・ハラスメントが問題視されています。権威主義的な関係が一部にはあるのでしょうか。

黒田：それから、男女関係とか、セクハラとか、それが厳しくなった時は本当に大変でした。1980年代に急にこれが来ました。政治学部では一ヶ月に一回部会があり、昔は教授しか出席することができなかったのですが、30年ぐらい前から、大学院の学生なら誰でも来てディスカッションに参加することが許されようになりました。そこでセクハラの話もあつたのですが、何をもってセクハラと言うかということになりました。参加した女子学生が言うには、男子学生、もしくは男性の教授

が入ってきて「ああ、昨日美容院に行って髪形変えた？ きれいになったね」と言われたとしたならば、私はそれをセクハラとみなすと言いました。「今日は特別きれいに見えるよ」と言われたら、セクハラだと言うのです。男性は皆「ああ、そうですか」と聞いていましたが、あいさつもろくろくできなくなります。彼女は「私の考えを意外と思うのは私をセックスの対象としか見ていない証拠だ」と言うのです。その学生が、また美人で容姿端麗な若い女性だったので、「貴女だったらいつでもきれいだ」と言いたかった人が多数いたようですが、一瞬男性は皆、口を閉ざして何も言いませんでした。

———：日本はその10年後ぐらいです。90年代の終わりごろに問題になりました。

黒田：セクハラの問題は大変でした。あいさつでよかれと思って言ったのが、「今日は素敵だね」と言ったら性の対象となるなんて。まあ、そのセンシティブリティというものも結局、文化によって違います。文化だけではなく時代もあるのでしょうか。昔はそんなこと全然構わなかったのですけどね。どうなのでしょうね。

———：だいぶ長い間お邪魔しまして、ありがとうございました。

黒田安昌先生の経歴と業績

黒田安昌 (Kuroda Yasumasa)

1931年東京生まれ、早稲田大学を中退し渡米、1962年オレゴン大学政治学部で政治学博士を取得、博士号取得後プリンストン大学経済学部での研修終え、モンタナ州立大学、南カリフォルニア大学 (USC)、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA)、ハワイ大学で教鞭を取る、エルサレムのヘブライ大学トルーマン平和研究所、統計数理研究所 (文部省)、関西大学法学部等の客員研究員を勤め、2002年に帰日後、早稲田大学客員研究員、國學院大學日本文化研究所共同研究員を経て、現在慶応大学の中東世論調査の学外協力者、ハワイ大学名誉教授、ハワイ州高等教育機関留学支援センター顧問として、データ分析、執筆、講演活動を続けている。

- ◆ 人名事典 Who's Who in America (1996年以降)、Who's Who in the West (1970年以降)、Who's Who in the World (1994)、Who's Who among Asian Americans (1994)、Who's Who in Hawaii, Contemporary Authors (1993)など欧米発行の人名辞典参照
- ◆ 日・米・中近東に関する著書・学術論文百数十(主に英語その他アラビア語、日本語等)。主たる著作：The Core of Japanese Democracy: Latent Interparty Politics, (New York: Palgrave, 2005); 共著者林知己夫。Japanese Culture in Comparative Perspective, (Westport, CT: Praeger Publishers, 1987)。邦訳書：秋元律郎・小林宏一訳「地方都市の権力構造」、勁草書房、1976年。

専門分野

機能的専門分野：比較世論調査、政策決定過程・構造、平和安全保障、国際関係

地理的専門分野：日本、アメリカ、ハワイ、中近東、パレスチナ・イスラエル

学歴

1951年早稲田大学政経学部中退、1956年オレゴン大学社会学学士号、1959年同大学院政治学修士、1962年同大学院政治学博士号終了、1962年NSFフェローとしてプリンストン大学にてポストドクター用ゲーム理論研修修了

教歴

1957 - 1960年オレゴン大学政治学部助手、1960 - 1962年モンタナ州立大学政治学講師、1962 - 1964年同助教、1964 - 1966年南カリフォルニア大学政治学助教授 (USC)、1965 - 1966年カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) 政治学客員助教授、1966 - 1972年ハワイ大学政治学準教授、1972 - 2002年同大学政治学教授、2002年以降同大学政治学名誉教授

業績一覧

1. 主要国際会議主催歴

(1) American National Interest in the Middle East Conference

Sponsor: National Council on US-Arab Relations

(2) Middle East Peace: Economic and Political Opportunities for the United States, the Arab World and Japan, March 1990.

参加者：Former Presidential Candidate George McGovern, Former Sen. Adlai E. Stevenson, Former Sec. of Defense Frank C. Carlucci, Kuwaiti Ambassador Sheikh Saud Naser Abu-Sabbah, Minister Ryōzō Katō (前駐米大使), Deputy Director General of the ME Bureau Tomio Uchida, Council General Masaji Takahashi, その他：日米アラブ諸国とイスラエルからジャーナリスト等多数
後援：American-Arab Affairs Council, ハワイ大学学長および複数の法人

(3) 「日本国会百年祭国際会議」1990年8月

参加者：竹下登元首相、小泉純一郎議員、山口鶴雄議員、近藤鉄夫議員、山口俊夫議員、Rep. Norman Y. Mineta (former US Secretary of Transportation), Rep. Neil Abercrombie, journalists such as Richard Halloran representing media such as New York Times, Washington Post, NHK, Asahi, Mainichi and その他：日米政治家著名学者とジャーナリスト。

「ホノルル宣言」を竹下元首相とミネタ下院議員が日米を代表して署名。それ以降、毎年ハワイにて会議を開催し、日米の友好関係を深めることを誓約。

後援：佐川急便、U. of Hawaii Japan Endowment Fund, Central Pacific Bank, City Bank, 日産自動車、ソニー・ハワイ and other corporate donors

(4) 「第一回ハワイ日米安全保障問題会議：議員、学者とジャーナリストのつどい」1991年8月

参加者：HR Minority Leader Richard A. Gephardt, Sen. William V. Roth, Sen. Daniel Akaka, Rep. Leon Panetta (元クリントン大統領首席補佐官), Rep. Pat Schroeder, Rep. Neil Abercrombie、竹下登元首相、森山真弓元大臣、矢野順也議員、村田敬二郎議員、武藤嘉文議員、石川要三議員、その他：著名日米学者とジャーナリスト多数

2. 出版

(1) 書籍

1. *Reed Town, Japan: A Study in Community Power Structure and Political Change.* (Honolulu: The University Press of Hawaii, 1974).
2. 『地方都市の権力構造』 translated by Ritsuo Akimoto and Kō'ichi Kobayashi. (Tokyo: Keisōshobō, 1976).
3. With Alice Kuroda. *Palestinians without Palestine: A Study of Political Socialization among Palestinian Youths.* (Washington, D.C.: The University Press of America, 1978).
4. With Tawfic E. Farah. Eds. *Studies in Political Socialization in the Arab States.* (Boulder, Colorado: Lynne Rienner Publishers, 1987).
5. *Japan in a New World Order: Contributing to the Arab-Israeli Peace Process.* (New York: Nova Science Publishers, Inc., 1994).
6. With Chikio Hayashi. *Japanese Culture in Comparative Perspective.* (New York: Praeger, 1997).
7. *The Core of Japanese Democracy: Latent Interparty Politics.* (New York: Palgrave Macmillan, 2005).

(2) モノグラフ

- 1 *A Guide to Social and Behavioral Science Journals in Japan.* Honolulu, Hawaii: The Institute of Advanced Projects, East-West Center, 1969. 157pp.
- 2 With Tatsuzō Suzuki, et al. *A Study of Japanese Americans in Honolulu, Hawaii.* Tokyo: The Institute of Statistical Mathematics, 1972. 80pp.
- 3 With Chikio Hayashi et al. *Towards the Development of Statistical Analysis for the Study of Comparative Cultures: An Attitudinal Study of Honolulu Residents.* Tokyo: The Institute of Statistical Mathematics, 1979.
- 4 With Chikio Hayashi et al. *Honolulu Residents and Their Attitudes in Multi-Ethnic Perspectives: Towards a Theory of the American National Character.* Tokyo: The Institute of Statistical Mathematics, 1980, distributed by the University of Hawaii Press. 80 pp.
- 5 With Chikio Hayashi et al. *Honolulu's Japanese Americans in Comparative Perspective, Monograph 2.* Tokyo: The Institute of Statistical Mathematics, 1984, distributed through the University Press of Hawaii. 265 pp.
- 6 With Chikio Hayashi et al. *The Third Attitudinal Survey of Honolulu Residents, 1986,*

Monograph 3. Tokyo: The Institute of Statistical Mathematics, 1986, distributed by the University of Hawaii Press. 186 pp.

- 7 The Research Committee on the Study of Honolulu Residents, 1988. *The Fourth Attitudinal Survey of Honolulu Residents, 1988*, March 1990.
- 8 With Chikio Hayashi et al. *Toward the Development of Statistical Analysis for the Study of Comparative Culture: The Fourth Attitudinal Survey of Honolulu Residents, 1988*, Research Report, General Series No. 70, 1991. 316 pp.
- 9 With Chikio Hayashi et al. 「文化の伝播変容の統計科学的研究－ハワイ日系人・被日系人国際調査」、『統計数理研究所研究リポート 86』、2001年3月、236頁。

(3) 報告書

富田広士・黒田安昌。多文化世界における市民意識の動態調査：「レバノンの市民意識に関する世論調査報告書」、慶応義塾大学 21COE-CCC 市民意識比較分析ユニット・市民意識比較研究サブユニット、平成 18 年 3 月、109 頁。

(4) 特集編集者

Special issue on Japanese economic development and the Arab world, *The Journal of Arab Affairs*, 10(1), Spring 1991.

(5) 学術論文

- 1 “Recent Japanese Advances in the Human Sciences”, *The American Behavioral Scientist*, 7(6): 46–54, February 1964.
- 2 “Political and Psychological Correlates of Japanese Party Preference”, *The Western Political Quarterly*, 17(1): 47–54, March 1964.
- 3 “Correlates of the Attitude toward Peace”, *Background: Journal of the International Studies Association*, 8(3): 205–214, November 1964.
- 4 “Sociability and Political Involvement”, *Midwest Journal of Political Science*, 9(2): 133–147, May 1965.
- 5 “Newspaper Reading and Political Behavior in a Japanese Community”, *Journal of Communication*, 15(3): 171–181, September 1965.
- 6 “The Japanese View of President Kennedy”, *Asian Survey*, 5(11): 552–557, November

1965.

- 7 “Political Role Attributions and Dynamics in a Japanese Community”, *Public Opinion Quarterly*, 29(4): 602–613, Winter 1965.
- 8 “Agencies of Political Socialization and Political Change”, *Human Organization*, 24(4): 328-331, Winter 1965.
- 9 “Peace-War Orientation in a Japanese Community”, *The Journal of Peace Research*, 3(4): 380–388, 1966.
- 10 “Political Cynicism of Law Students in Japan”, *Monumenta Nipponica*, 22(1): 147–161, 1967.
- 11 “A Cross-cultural Analysis of the Desire for Political Power: Empirical Findings and Theoretical Implications”, *The Western Political Quarterly*, 20(1): 51–64, March 1967.
- 12 “Political Party Preference in a Japanese Community”, *Journal of Asian and African Studies*, 2(3): 174–185, 1967.
- 13 “Measurement, Correlates and Significance of Political Participation in a Japanese Community”, *The Western Political Quarterly*, 20(3): 660–668, September 1967.
- 14 “Psychological Aspects of Community Power Structure: Leaders and Rank-and-File Citizens in Reed Town, Japan”, *Southwestern Social Science Quarterly*, 48(3): 433–442, December 1967.
- 15 With Alice Kuroda. “Aspects of Community Political Participation in Japan: Sex, Education, and Generation in the Process of Political Socialization”, *Journal of Asian Studies*, 27(2): 220–251, February 1968.
- 16 “A Comparative Analysis of Local Politics in Asia: Methodological and Theoretical Concerns”, *Il Politico*, 36(2): 239–267, 1971.
- 17 With Alice Kuroda. “Personal Political Involvement of Palestinian Youths: A Study of Political Socialization in a Revolutionary Polity”, *Middle East Forum*, 47: 51–65, Summer 1971.
- 18 “Young Palestinian Commandos in Political Socialization Perspective”, *The Middle East Journal*, 26(3): 253–270, Summer 1972.
- 19 “Factions and Community Politics in Reed Town, Japan”, *Il Politico*, 37(2): 285–303, June 1972.

- 20 “Crisis Politics: The Case of Japan-U.S. Relations”, 『国際政治』 [*International Politics*], 46: 1–16, 1972.
- 21 With Alice Kuroda. “Palestinians and World Politics: A Social-Psychological Analysis”, *Middle East Forum*, 48: 45–57, 1972.
- 22 “Protest Movements in Japan: A New Politics”, *Asian Survey*, 12(11): 947–952, November 1972.
- 23 “Public Opinion Surveys in Japan: Perspectives for a Data Library”, *Public Data Use*, 2 (3): 26–29, July 1974.
- 24 “Levels of Government in Comparative Perspective: Conceptual and Methodological Considerations”, *Comparative Political Studies*, 7(4): 430–440, January 1975.
- 25 With Alice Kuroda. “Peace and Development in the Pacific: A Projective Analysis”, *Pacific Community*, 7(3): 347–360, April 1976.
- 26 With Tatsuzō Suzuki and Chikio Hayashi. “A Cross-National Analysis of the Japanese Character among Japanese-Americans in Honolulu”, *Ethnicity*, 5(1): 42–59, March 1978.
- 27 “Japan and the Arabs: The Economic Dimension”, *The Journal of Arab Affairs*, 3(1): 1–17, Spring 1984.
- 28 「言語に規制される国際性」、『翻訳の世界』、9(10): 24–27、1984年10月。
- 29 “al-tahdīth wa al-’ightirāb fī al-yābān”, [Modernization and Alienation in Japan], *al-Mustaqbal al-’Arabī* [The Arab Future], 69: 122–137, November 1984.
- 30 “al-ru’ya al-yābāniyya lil-’ālam al-’arabī: tabī’atuhā wa āfāquhā”, [Japanese Perceptions of the Arab World: Their Nature and Scope], *al-Mustaqbal al-’Arabī* [The Arab Future], 82: 69–86, December 1985.
- 31 “The Fifth Arab-Israeli War, 1982: Further Instances of Israel’s Sacred Terrorism and New Manifestation of Jewish Conscience”, *International Journal of Islamic and Arabic Studies*, 2(1): 69–86, 1985.
- 32 “The Oil Crisis and Japan’s New Middle East Policy, 1973”, *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 1: 150–187, 1986.
- 33 With Chikio Hayashi and Tatsuzō Suzuki. “The Role of Language in Cross-National Surveys: American and Japanese Respondents”, *Applied Stochastic Model and Data Analysis*, 2(2): 43–59, 1986.

- 34 With Chikio Hayashi et al. “The End of Westernization and the Beginning of New Modernization: Attitudinal Dynamics of the Japanese, 1953–1978”, *The Arab Journal of the Social Sciences*, 2(1): 18–36, April 1987.
- 35 With Fereidun Fesharaki and Wendy Schultz. “Historical Perspectives on Japanese Energy Policies”, *Energy Systems and Policy: An International Interdisciplinary Journal*, 11: 121–141, 1987.
- 36 With Nobuo Asai. “dirāsāt al-sharq al-’awsat fī al-yābān”, [Middle East Studies in Japan], *Al Mustaqbal al Arabi* [The Arab Future], 102: 124–144, August 1987.
- 37 “Leadership Recruitment Patterns in the Japanese House of Representatives: General Elections 1–30, 1890–1963”, *International Political Science Review*, 9(2): 119–130, April 1988.
- 38 With Fereidun Fesharaki and Wendy Schultz. “Japan’s LNG Trade: Policy Innovations and Business Risks in a Historical Context”, *Journal of Business Administration*, 17(1 and 2): 219–248, 1987–1988.
- 39 “al-yābān wa al-sirā’ al-’arabī al-’isra’īlī”, [Japanese Views on the Middle East Conflict], *al-Jam’iyya al-’Arabiyya lil-Dirāsāt al-Duwalīyya*, [The Arab Journal of International Studies], 2(1): 80–89, Winter 1989.
- 40 “Japan, the Arab World and Israel”, *American-Arab Affairs*, 28: 9–21, Spring 1989.
- 41 The above article was translated into Japanese by Toshiyuki Nishikawa, “Arabu-Isuraeru funsō: Wakainimuketo no Nihon no kōken”, [The Arab-Israeli Conflict: The Role of Japan towards Peace in the Middle East], *Surugadai hōgaku* [Surugadai Journal of Law and Politics], 4(1): 324–305, Oct. 1990.
- 42 With Tatsuzō Suzuki. “Arab Students and English: The Role of Implicit Cultures”, *Behaviormetrika*, 29: 23–44, 1991.
- 43 With Tatsuzō Suzuki. “A Comparative Analysis of the Arab Culture: Arabic, English and Japanese Languages and Values”, *Behaviormetrika*, 30: 35–53, 1991.
- 44 With Tatsuzō Suzuki. “tahālīl muqārana al-thaqāfa al-’arabiyya: al-lughāt wa al-qiyam al-’arabiyya wa al-’inkilīziyya wa al-yābāniyya”, *al-Mustaqbal al-’Arabī* (The Arab Future), 163: 14–31, September 1992.
- 45 With Michael Haas and Raschada Jiwalai. “Models of Foreign Policy Decisionmaking: The Cases of Japan and Thailand”, *The Journal of East Asian Affairs*, 10(2): 223–261,

1996.

- 46 “Arab-Japan Relations: Cultural Dimensions in Comparative Perspective”, *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 12: 47–76, 1998.
- 47 “The Rainbow Model of American Ethnic Groups”, *Behaviormetrika*, 30(1): 39-62, 2003.
- 48 “Main Components of Arab Culture in Cross-Language Perspective,” 日本中東学会年報, 22-2: 175-192, 2006.

(6) 小論・論文・chapters

- 1 “Caste”, in Joseph Dunner ed., *The Handbook of Historical Concepts*. New York: American Philosophical Library, 1967, pp.153-5.
- 2 “Dynasty”, in Joseph Dunner ed., *The Handbook of Historical Concepts*. New York: American Philosophical Library, 1967, pp.311-2.
- 3 “Fatalism” in Joseph Dunner ed., *The Handbook of Historical Concepts*. New York: American Philosophical Library, 1967, pp.346-7.
- 4 “Orientalism”, in Joseph Dunner ed., *The Handbook of Historical Concepts*. New York: American Philosophical Library, 1967, pp.661-2.
- 5 “Shognate”, in Joseph Dunner ed., *The Handbook of Historical Concepts*. New York: American Philosophical Library, 1967, pp.875-6.
- 6 “Psychological Aspects of Community Power Structure: Leaders and Rank-and-File Citizens in Reed Town, Japan”, in Charles M. Bonjean, Terry N. Clark, and Robert L. Linberry, Eds. *Community Politics: A Behavioral Approach*, New York: The Free Press, 1971, pp.237–243.
- 7 “Political Role Attribution and Dynamics in a Japanese Community”, in George Yamamoto and Tsuyoshi Ishida, Eds. *Selected Readings for Modern Japanese Society*, Berkeley: McCutchan Publishing Corp., 1971, pp.176–185.
- 8 “Political Role Attribution and Dynamics in a Japanese Community”, in Lewis Bowman and G. R. Boynton, Eds. *Political Behavior and Public Opinion: Comparative Analysis*, Englewood, New Jersey: Prentice-Hall, 1974, pp.170–181.

- 9 “Ecology and Local Politics: A Citizen Movement in Japan”, in F. C. Bruhns, F. C. Cazzola and Jerzy Wiatr eds. *Local Politics, Development and Participation*, Pittsburgh: University Center for International Studies, University of Pittsburgh, 1974, pp.116–126.
- 10 The above article appeared in Italian: *Partecipazione e Sviluppo Nella Political Locale*. a cura di J. J. Wiatr e Franco Cazzola, Roma: Officina Edizione, 1974.
- 11 With Alice Kuroda. “Socialization of Freedom Fighters: The Palestinian Experience”, in Ibrahim Abu-Lughod and Baha Abu-Luban, Eds. *Settler Regimes in Africa and the Arab World*, Wilmette, Illinois: The Medina University Press, (1974): pp.147–161.
- 12 “Asian Political Scientists in North America: Their Aspirations and Problems”, in Chun-tu Hsueh ed. *Asian Political Scientists in North America: Professional and Ethnic Problems*, School of Law, University of Maryland: Occasional Papers/Reprint Series in Contemporary Asian Studies, 5: 23–31, 1977.
- 13 With Madan Lal Goel. “Foreign-Born Political Scientists in North America: A Profile”, in the same publication as above, pp.67–90.
- 14 With Tatsuzō Suzuki. “A Note on Immigrants to Hawaii”, in Shōgo Koyano, ed., *A Comparative Sociological Study of the Adaptation and Attitude Change of Asian Emigrants*, Migration Research Series, No. 1, Asian-Canada Migration Research Team, Department of Sociology, the University of Tsukuba, December 1977, pp.30–39.
- 15 With Patricia G. Steinhoff, Robert T. Boblin, Alfred Bloom, Robert Wargo, and Kenkō Futaba. 「日本文化と宗教について」 [On Japanese Culture and Religion], in Robert N. Bellah, Alfred Bloom, and Kenkō Futaba Ed. 『親鸞をめぐるもう一つの文化論』 [A Theory of Culture in Shinran Perspective]. Kyoto: 西本願寺出版部, 1977, pp.236–287.
- 16 With Ritsuo Akimoto. “Structural Changes in Japanese Local Government”, in *Polish Round Table: Yearbook 1976–1977*, Polish Association of Political Sciences, Special Issue on Current Trends in Local Power and Authority in the Contemporary World edited by Sylwester Zawadzki, 1977, pp.269–281.
- 17 “Japan's Future in the Pacific and Asia: Perspectives on the 80s.” in F. Quei Quo ed., *Politics of the Pacific Rim: Perspectives on the 1980s*, Burnaby, B.C.: SFU Publications, 1983, pp.89–95.

- 18 “Comments on U.S. Policy Towards East Asia”, in F. Quei Quo ed., *Politics in the Pacific Rim: Perspectives on the 1980s*, Burnaby, B.C.: SFU Publications, 1983, pp.229–241.
- 19 “Japanese Perceptions of the Arab World: Their Nature and Scope”, in Ronald A. Morse, ed. *Japan and the Middle East in Alliance Politics*, Washington, D.C.: The Wilson Center, Smithsonian Institution Building, 1985, pp.25–40.
- 20 「アメリカのユダヤ人」、広河隆一編『ユダヤ人とは何か』、東京: 三友社出版、251–264 頁。
- 21 “Japanese Perceptions of the Arab World: Their Nature and Scope”, in Ronald A. Morse ed., *Japan and the Middle East in Alliance Politics*, Washington, D.C.: University Press of America, Inc., 1986, pp.41–55.
- 22 「永遠のパトロン—アメリカ—」、広河隆一編『ダイヤモンドと死の商人』、東京: 三友社出版、1986、92–118 頁。
- 23 With Alice Kuroda. “Palestinians and World Politics: A Socio-Psychological Analysis”, in Tawfic E. Farah and Yasumasa Kuroda Ed. *Studies in Political Socialization in the Arab States*, Boulder, Colorado: Lynne Rienner Publishers, 1987, pp.161–170.
- 24 「ハワイの政治」[Politics in Hawaii] in 『'88-'89 新百科』[*All About Hawaii: 1988–9*]. Honolulu: East-West Journal Corporation, 1988, pp.9–22.
- 25 With Tatsuzō Suzuki. “Language and Attitudes: A Study in Arabic, English, and Japanese on the Role of Language in Cross-cultural Thinking”, in Donald M. Topping, Doris C. Crowell, and Victor N. Kobayashi. Eds. *Thinking across Cultures*, Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, 1989, pp.147–161.
- 26 With Takayoshi Miyagawa. “A Collective Biography of Japanese Diet Members, 1890–1990” in Carol Ramleb ed. *Biography: East and West*, Honolulu: College of Languages, Linguistics, and Literature, University of Hawaii, 1989, pp.14–36.
- 27 With Nobuo Asai. “West Asian Studies in Japan”, in Tareq Y. Ismael ed. *Middle East Studies: International Perspectives on the State of Art*, New York: Praeger, 1990, pp.174–199.
- 28 “The Intifada”, in Majid Tehranian ed. *Letters from Jerusalem*, Occasional Paper No. 4. Honolulu: Spark M. Matsunaga Institute for Peace, 1990, pp.9–26.

- 29 “Japan and the Israeli-Palestinian Conflict”, in Edward Lincoln ed. *Japan and the Middle East*. Washington, D.C.: The Middle East Institute, 1990, pp.40–49.
- 30 With Alice K. Kuroda, Chikio Hayashi and Tatsuzō Suzuki. “The End of Westernization and the Beginning of New Modernization in Japan: Attitudinal Dynamics of the Japanese, 1953–1983”, in Chikio Hayashi and Tatsuzō Suzuki, Eds. *Beyond Japanese Social Values: Trend and Cross-National Perspectives*, Tokyo: The Institute of Statistical Mathematics, 1990, pp.251–269. [Reprint]
- 31 With Chikio Hayashi, Fumi Hayashi, Tatsuzō Suzuki, and L. Lebart. “Comparative Study of Quality of Life and Multidimensional Data Analysis: Japan, France and Hawaii”, in Chikio Hayashi and Tatsuzō Suzuki, Eds. *Beyond Japanese Social Values: Trend and Cross-National Perspectives*, Tokyo: The Institute of Statistical Mathematics, 1990, pp.320–332.
- 32 With Chikio Hayashi and Tatsuzō Suzuki. “The Role of Language in Cross-National Surveys: American and Japanese Respondents”, in Chikio Hayashi and Tatsuzō Suzuki, Eds. *Beyond Japanese Social Values: Trend and Cross-National Perspectives*, Tokyo: The Institute of Statistical Mathematics, 1990, pp.619–638. [Reprint]
- 33 With Tatsuzō Suzuki. “Language and Attitude: A Study in Arabic, English, and Japanese on the Role of Language in Cross-cultural Thinking”, in Chikio Hayashi and Tatsuzō Suzuki, Eds. *Beyond Japanese Social Values: Trend and Cross-National Perspectives*, Tokyo: The Institute of Statistical Mathematics, 1990, pp.639–656. [Reprint]
- 34 With Tatsuzō Suzuki. “A Comparative Attitudinal Analysis of Rationality: Arab, American and Japanese Students”, in Chikio Hayashi and Tatsuzō Suzuki, Eds. *Beyond Japanese Social Values: Trend and Cross-National Perspectives*, Tokyo: The Institute of Statistical Mathematics, 1990, pp.657–690. [Reprint]
- 35 「ハワイの政治の仕組み」 [Politics in Hawaii] in 『新ハワイ百科』 [All About Hawaii], Honolulu, Hawaii: East-West Journal Corporation, 1991, pp.11–26.
- 36 With Ukeru Magosaki. “Japanese-Gulf Relations toward the Year 2000”, in Charles F. Doran and Stephen W. Buck Eds. *The Gulf, Energy, and Global Security: Political and Economic Issues*, Boulder, Colorado: Lynne Rienner Publishers, 1991, pp.173–188.

- 37 “Japan and the Gulf in the 1990s”, in Stephen Buck and Charles Doran Ed. *The Gulf, Energy, and Global Security: Political and Economic Issues*, Boulder, Colorado: Lynne Rienner Publishers, 1991, pp.173–188.
- 38 “Bush's New World Order: A Structural Analysis of Instability and Conflict in the Gulf”, in Tareq Y. and J. S. Ismael Ed. *The Gulf War and the New World Order*, Gainesville, Florida: University Press of Florida, 1994, pp.52–76.
- 39 “Japan: An Economic Superpower in Search of Its Proper Political Role in the Post-Cold War Era”, in Tareq Y. and J. S. Ismael Ed. *The Gulf War and the New World Order*, Gainesville, Florida: University Press of Florida, 1994, pp.132–150.
- 40 “Public Opinion and Cultural Values”, in Michael Haas ed. *Multicultural Hawai'i*, New York: Garland Publishing, Inc., 1998, pp.131–146.
- 41 「変化してゆく日本文化：その要素と原因」、『特集 統計的日本人研究の半世紀』統計数理研究所、48(1)別冊: 77 - 92、2000年6月。
- 42 “Honolulu Survey 2000 and Its Objectives.” In 『文化の伝播変容の統計科学的研究—ハワイ日系人・非日系人国際調査 研究レポート 86』、統計数理研究所、2001年3月、11-21頁。
- 43 “Japan's Middle East Policy: Fuzzy Nonbinary Process Model”, Akitoshi Miyashita and Yōichirō Satō eds. *Japanese Foreign Policy in Asia and the Pacific*, New York: Palgrave, 2001, pp.101–118.
- 44 「アメリカとイラクそして日本のマスコミ」、『現代思想』4月臨時増刊、31(5): 38-43、2003年。
- 45 「ネオコン・シオニズム—ブッシュ政権を動かす思想」、『地域研究』、6(1): 85-108、2004年4月。
- 46 「中東政策と非二極モデル」、『現代日本のアジア外交—対米協調と自主外交のはざままで』、ミネルバ書房、2004年、111–134頁。
- 47 「羅生門と山桜—日本文化の真髓」、『学際』、12: 23-31、2004年7月。
- 48 “Civil Society in Lebanon: Its Consociational Democratic and Attitudinal Structure.” *Journal of Political Science and Sociology*, 6: 21-54, 2006.

- 49 「第五章 マジョリティなきレバノンの市民意識の深層構造」、『市民社会の比較政治学』、小林良彰・富田広士・粕谷裕子編、慶応義塾大学出版会、平成 18 年、147 - 186 頁。
- 50 “Toward Security for Democracy and Civil Society: East and West Asia”, *Journal of Political Science and Sociology*, 8: 47-68, 2007.

(7) 論文・レポート

- 1 “Recent Japanese Advances in Political Science”, *The American Behavioral Scientist*, 12(3): 3–10, January 1969.
- 2 “A Guide to Social Science Journals in Japan”, *The American Behavioral Scientist*, 12(3): 46–50, January 1969.
- 3 「他流試合を挑まれる日本外交」、『政治広報』、1: 62–63、1976 年。
- 4 「第五次アラブ・イスラエル戦争 1982 年—ここに極まるイスラエルの聖なるテロリズムとユダヤ人の良心」、『フィラステン・ビラデイ』 [The Fifth Arab-Israeli War, 1982: New Heights of Israel's Sacred Terrorism and Jewish Conscience]. *Firasutein Biradi* [Filastin Biladi]. No. 34 (November 1982): 34–40 and No. 35 (December 1982): 18–25.
- 5 “Politics in Hawaii: 50 Years from Today”, *The Hawaii Herald*, 4(1): 2–5, January 1, 1983.
- 6 “Back-to-School Diplomacy”, *PHP*, July 1983, pp.6–9.
- 7 “Japanese Superiority Complex”, *PHP Intersect*, 3(1): 28–29, January 1987.
- 8 With Alice Kuroda. “Hawaii Democrats Support Palestinian Statehood”, *The Washington Report on Middle East Affairs*, 7(8): 13, December 1988.
- 9 With Alice Kuroda. “Japan Launches Major Study of Arab Society”, *The Washington Report on Middle East Affairs*, 8(1): 15, May 1989.
- 10 “Japan and the Arab World”, *The Journal of Arab Affairs*, 10(1): 1–4, Spring 1991.
- 11 “Japanese Patterns of Economic Development”, *The Journal of Arab Affairs*, 10(1): 5–40, Spring 1991.
- 12 With Yoshiki Hatanaka. “Japan and Arab World Economic Relations”, *The Journal of Arab Affairs*, 10(1): 87–115, Spring 1991.
- 13 “Sociology of Paradise: Hawaii Today and Tomorrow”, *Kansai University Review of Law and Politics*, 14: 1–20, March 1993.

14 「変化してゆく日本文化：その要素と原因」、『特集 統計的日本人研究の半世紀』、
統計数理研究所、48(1)別冊：77 - 92 別冊、2000年6月。

(8) 米連邦会議記録

“Japan in a New World Order: Contributing to the Arab-Israeli Peace Process”, in
Congressional Record, Proceedings and Debates of the 103 Congress, First Session, Vol.
139(143), Washington, Tuesday, October 21, 1993, 9 pp.

イスラーム地域研究東京大学拠点グループ2

TIAS Middle East Research Series No.2

中東イスラーム研究の先達者たち No.1

弱者の細道を行く：アメリカ中東研究に携わった日本人の研究者

発行日 2008年8月

著者 黒田安昌

発行者 人間文化研究機構地域研究推進事業
「イスラーム地域研究」東京大学拠点
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学文学部アネックス内

電話 03-5841-8953

e-mail : iaschuto@l.u-tokyo.ac.jp

ISBN 978-4-904039-07-6

印刷所 (有) 日本興業社